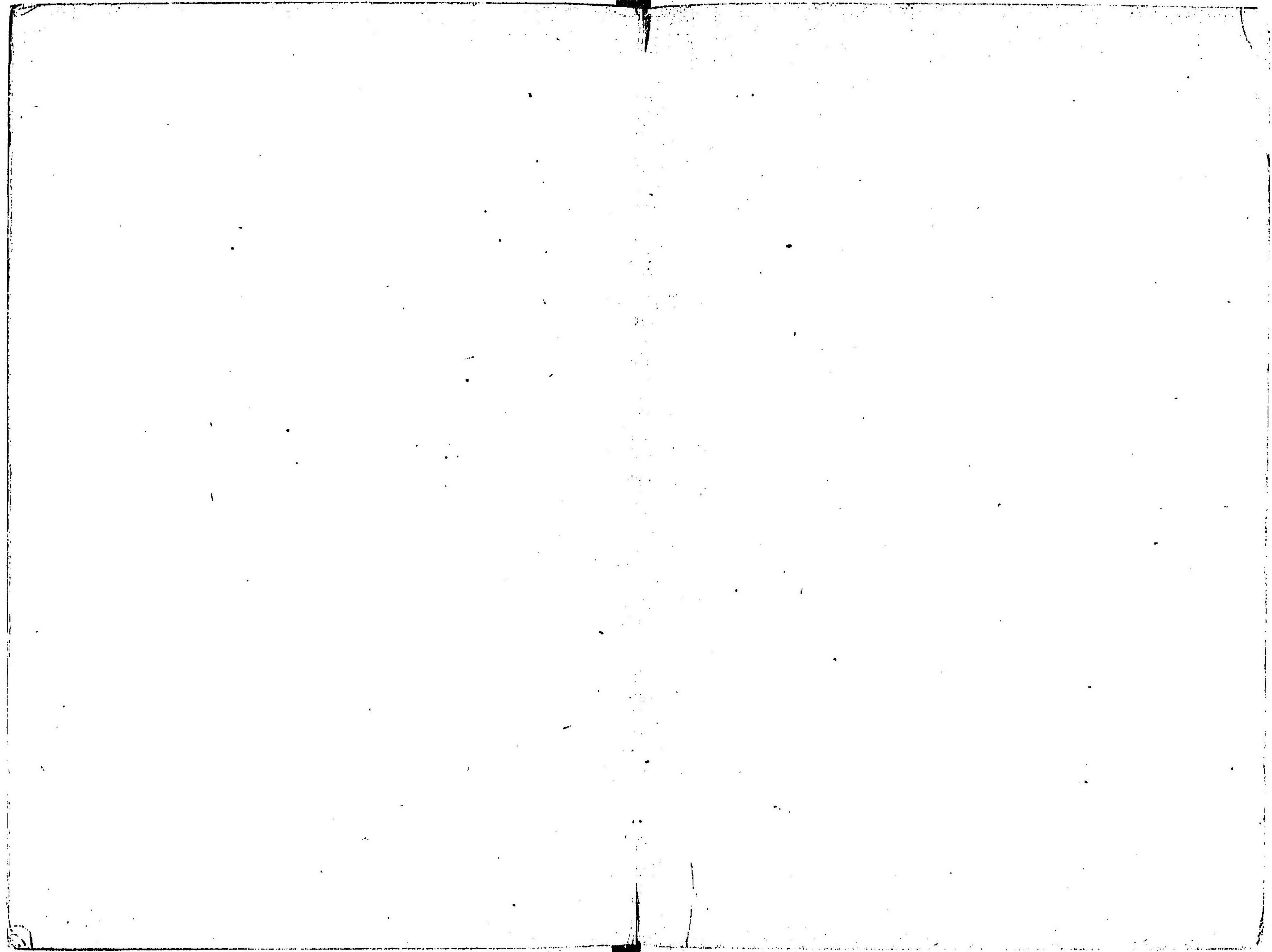


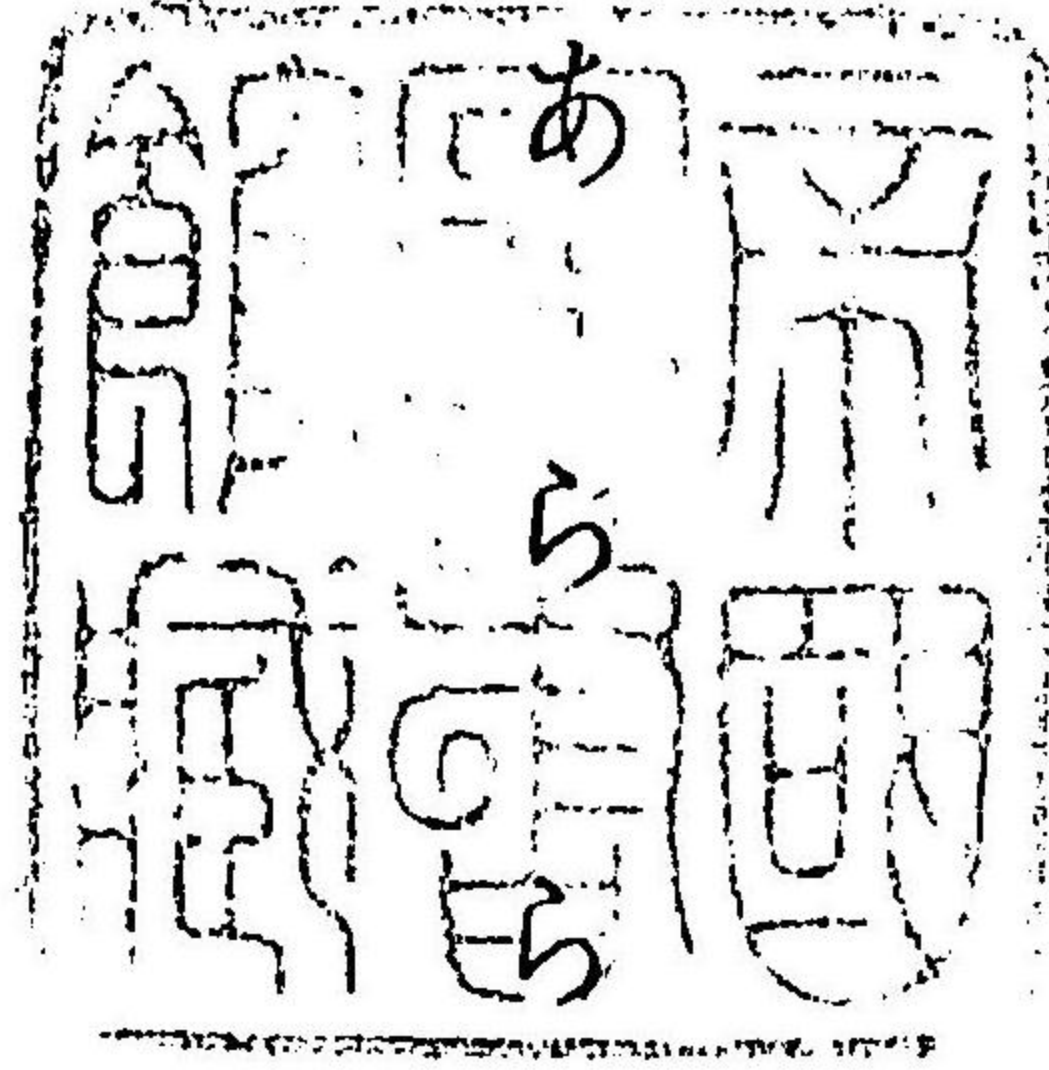
あ ら せ

水野葉舟著





5711  
461



あ



吾が第一の集を、遙かにニュー・ヨーク  
にある高村光太郎君に寄す

葉  
舟

(1) 次 目

文集

目次

赤城の牛	七五
春宵	六九
鳥聲	六〇
晩餐	四八
木枯	三一
霧	一九
舊歡	一

頁數

鸚鵡	八六
鸚鵡音	九三
犬	九九
月光	一〇二
窓	一一九
暗夜	一二六
櫟林	一三五
裏畑	一四八
蟋蟀	一五六
銀杏樹	一六二
『私雨』	一七一

詩集

相模の濱に宿りて	一八五
都を遠くさかり來て	
夕もや籠むる沖つ島	
北に生れし渡り鳥	
ひそかに胸にしるしけり	
あした落葉の松の道	
何故と君問ふ勿れ	
小松原	一九四
落葉こみち	
東屋	

池の邊  
 秋の聲  
 風の音  
 はかなき胸の根なし草……………二〇二  
 稍過ぎ行く風の音の……………二〇四  
 あゝ撫子の花散りて……………二〇六  
 いつか夏草の生ひ出でて……………二〇八  
 別れ……………二一〇  
 流れてつきぬ秋の野の……………二一二  
 朽ちにし舟……………二一四  
 尾長島の鳴くを聞きて……………二一六  
 醒めざる夢……………二一八

少女に……………二二〇  
 三首  
 淋しき人に……………二二五  
 二首  
 森の夏……………二三〇  
 懺悔……………二三三  
 面影……………二三六  
 吾が目には水ながる……………二三九  
 追懐……………二四四  
 露草(序歌)  
 ひるがほ  
 夕映

清き人に

尾長鳥

虹

月光

雨の夜

道のはとりにて

我れはたゞ獨りなり.....

目次 をはり



水野葉舟

夢程、可笑なものはない。

この言葉には、誰でも必ず頷くであらう。誰れの記憶の中にも、とりとめもない、わからない、しかし、妙に心に刻み付けられて居る夢の一つ二つが無い人はあるまい、と私は思はれる。

こんな事を思ふと、夢だと言つて、一概に無かつた事だとは言はれない。全



く、人間には、現実と、夢との二つの國があると云ふ事が言はれる。その上に、或る場合には現實が夢なのか、夢だと言つて居るものが、現在あつた事だかを、明かに分つ事の出来ない場合がある。こんな事に遭遇する度に、私は人にとつて、夢の國と言ふものが、嚴に存在して居る事を疑はない。

しかし、こう言つたのは、あなたがち自分の夢物語をする爲めの前置ではない。たゞ私の思ひ付きだけである。實は私はこゝで、自分の夢物語がして見たいのだ。

そんな事のあつたのは、私が學校を出て、一年ばかりした後、年の暮の事であつた。私の勤めて居る銀行では、年末の決算期なので、私達行員一同は、夜も夜業をして、急がしがつて居るであつた。其日も銀行を出たのは夜の九時、外は寒い風が慄面もなく、吹きすすんで居る。其でもそれがいゝ心持で、ほつと息を吐いて、今日もこれでしまひだと思ふと、がっかりする程であつた。

こんなにして疲れて歸つて來ると、頭が何となく彈力を失つて居て、一種の寂寥な、物悲しい情が湧いて來る様だ。

何處かで、

「お前は、何の爲めに働いて居るのだ！」

と言はれる様な心持がして、もう自分の天分も捨て、しまつた、自分の才も擲つた、自分は器械の様になつて、一生を過すのだ、と言ふ風に思はれる。急いで思ひ歸して、書を読んで見ても、少しも興味を持たない。まるで神經衰弱の患者の様な姿だ。

それでその晩は、食事の時に、常にもなく酒を飲んで、そのまま寢床に入つてしまつた。——寒い晩であつた。

ところが、寢られない。部屋を暗くして見たひと思つて、燈火を消した。すると目の前にもやもやしたものが顯はれて來る。それが雲の湧く様に、私の身

を取り圍むとかと思ふと、急に其處等が遠く見わた、四邊がしんとした様な氣持がされた。……私はわけもない事を止め度もなく考へて居るのだ。  
暫くすると、酒の酔が出て、頭がぼんやりとなる。……あゝいゝ心持になつた。……少しだるい様だと思つて居るうちに、何時の間にか、私は廣い堀の堤に立つて居た。

「オヤ、何時の間にこんな處に來たのだらう。と見まはして居ると、彼方から車が四五臺、勢よく續いて馳けて來る。誰れか來たなと思つて、ぼんやりして立つて居る、私の傍まで來て、びつたり止まつた。中から盛裝した女が、順々に降りる。皆、音樂會にでも行く人の様な、衣飾をして居る。私はそれを見て居た。

その女達は、私の傍を通つて、すん／＼行く。ふり返つて見ると、(私は今迄氣が付かなんだが)何か立派な建物の前に立つて居たのだ。皆は其處に入つて

行くのらしい。

はて變な處があるものだ。東京にはこんな處は無い筈だかと思つて、私もその女達の跡について入ると、中は平な、廣々とした庭だ。大木が處々に立つて居て、何處か整然として居る。や、これはいゝ庭だ、と思つて、大きな櫻の木のある方に歩いて行くと、そこに最前の女達が立つて居る。

私はそつと其わきを通り脱げ様と思つて、うつむいて歩いて居た。すると、

「まー 吉田さんー」

と、私を呼ぶ人がある。ふり返つて見ると、秋子だ、そこに立つて居て、私を呼んだのは、榊原に貰はれて行つた、秋子なんだ。

四五年も逢はなんだが、秋子は少しも變つて居なかつた。昔の様な、華美好きな衣飾をして、見るから晴々する瞳付が、そのまゝだ。しかし、何處か物なれた風も見わる。

私は立ち止まつて、

「や、秋さんが、久しく逢ひませんでしたね」と言ふと、

「ほんとに、御久し振りね、何處にいらしたの」

と聞かれて見ると、此處は何處だかちつとも判らない。

「こゝに來たのだが、一體こゝは何處なのです」

と問ふ、秋子は笑つて、

「こゝ、殿様のお屋敷ですよ」

「殿様つて誰です」

「神原の殿様よ」

と云つて笑ふ、私は神原といふ言葉に、一種言はれぬ苦痛を覺わした。

こゝやつて話して居る中に、何時の間にか、其處に居た外の女達は、他處に行つてしまつたと見えて、居なくなつた。秋子は私に並んで、昔、二人が合歡

の花の下で、よく話した時の様に、人を吸取る様な、暈付をして、私を見て居る。(神原に嫁くといふ事に成つて、兩方で怒つたり、悲しんだりした事はまるで、知らない人の様に)——それを見ると、私もいやな心が消えてしまつた。

「そこらを歩いて見ようか、秋さん」

と少し臆病らしく言ふと、

「わ、行きましよう、こゝのお庭は、廣くつて、私、ほんとにいゝ心持です」

二人は並んで歩き出した。

それからは、私達は全く、何の障害もない、許された人の様になつて、戯れたり、話したり、馳け出したりした。

やがて、秋子が、

「そらの歌、先よく唱つたでしょう、あの歌、うたひましよう」

と言ふから、私は一所に聲を出して唱はうとした。——すると、何時の間にか、其處らが暗くなつて、心のめいる様な風が吹いて來た。

私達は急いで、東屋のある方に引き返すと、雨が降つて來た。私は秋子をかばふ様にして、小さい東屋に入つた、と思ふと、秋子が何處かに行つてしまつて見ねなくなつた。

「秋さん！ 秋さん！」

私は呼んで見ようとしたが、聲が出ない。も一つ聲をはり上げてと思ふと、ふつと目が醒めた。「榊原の殿様の庭」どころか、私は昨晚のまゝの寢床に居た。そしてもう夜が明けたらしい、あかるくなつて居る。

私は起きて、「夢かなあ」と思つたが、何故こんな夢を見たのだらう、とつぶやいた。全く、この二三年、秋子の事などは、思ひ出しもしなかつたのに。暫くして又、會社に出る時間が來たので、洋服を着て家を出た。今朝はやけ

に寒い。外套が薄いから、勢を付け様と思つて急いで歩いた。江戸川を過つて、新諏訪町の電車の停留所の處に行くと、むかふに、學校も一所に出て、今も一所に勤めて居る、加藤に會つた。

「や、寒いね」

加藤が、落付いた例の聲で言ふ、

「寒いね」

と言つて居る中に電車が來たので、それに一所に乗つた。

電車に乗つてからも、私はいつになく昨晚の夢を思ひ出して、臆げになつて居る、秋さんの顔を思ひ浮べて見た。だがどうも明瞭に、其輪郭を思ひ出せない。美しい目——可愛い唇——こうまでは思つて見たが、どうも満足に思ひ出せない。少し心持がいらいらして來た。

電車は、お茶の水の坂を上つて行く。加藤は平常の習として新聞を見て居る。

一寸その横顔を見たが、一心に何か見入つて居る様なので、私は又考へ初めた。すると、此度は、ふいと昔の事を思い出した。私が大學の三年の時だつたが、眞赤な花にでも包まれて居る様な夢を見て、馬鹿に華美な事を想像して居た、その時の事だ。秋子から毎日の様に手紙が来る。その中には、それ、人をはぐらかす様な、獨で微笑をもらさずには居られない様な、………人が見たら甘つたるくつて、嫌になるだらうと思はれる様な………例の美しい事、嬉しい事、やさしい事、楽しい事が、惜し気もなく書いてある。私はそれを飽きもせず、毎日、一つく新しく未だ見た事のないもの、様に、待ち受けて、何よりの心懸りにして居た。

手紙の届くのは、大抵、午後に定つて居た。學校から歸つて来ると、下宿の娘が——その頃、少し感着いて居たと見へて、——いやに、にやにや笑つて、また、御手紙ですよ、と餘計な「また」をくつつけて渡す。それを無言で受け取

つて見ると、それは秋子の、常時つかふ、桃色の状態だ。

「何を言つて来たのだらう」

小聲でこんな事を、獨語しながら、開けて見ると、金曜日には、植物園に行き、度いから、伴れて行けた。その前に、お宿に伺ひますつて言つて来た。

(その頃私は本郷に居た。秋子は麴町の元園町に——)

その時は、私は直ぐ返事を出したつて。私達はもう、言ひ過ぎる程、兩方の考へを話し合つては居たが、まだそんなに永ひ交際では無かつた。秋子に初めて逢つてから三月目だ、それで、私の家に来ると言ふのも、それが初めてであつたのだから、私は大騒ぎで、きつと待つて居るから、違はぬ様にと言ふので何か、親王様でもお迎へする様な、大それた事を書いて出した。………こんな事を思つて居ると、私は心が少し軽くなつた。何となく嬉しい様な氣がして、頭を擧げると、丁度、加藤がこつちを向いて居る。

「おい、朝つばらから、何をそんなに考へこんで居るんだ！」  
何か、戯を含んで居る様な笑を見せながら、言ふから、

「は、つまらない事だ」

と言つてまざらした。

やがて、電車が日本銀行前で停まつたので、降りた。

自分の机の前に、腰を掛けて、インキ壺の蓋を開けて、帳面を出して、さて、又戦場の様な仕事が始まる。何處を見ても、誰を見ても、力の續く限りと言つた様な風だ。

しかし、今日は私は少しも、仕事が苦しくない。何處かで待つて居る楽しいものが有る様で、それを見當に突進する、……と言つた様な心で、さつさと仕事に掛つた、仕事を仕て居る間でも、

「早く歸つていらつしやい！秋が待つて居てよ」

ど、耳のわきで言ふ様だ。

どかくする中に、正午になつた。

平常なら、これから暫く雑談が始まる時だが、今日は誰も、疲れて居ると見えて、方々で煙草をふかすばかりで、面白そうな話も出ない。年の暮でもあるのだから、仕事の外にも、心配事のある人もあらう。

今日は、人にはかまはず、又直ぐ自分の仕事に手を着けて、四時と言ふと大抵はかどつた。やれ嬉しやと思つて、夜業は用があると言ふので、斷つて大急ぎで電車に乗つた。

私は家に、秋子の手紙が待つて居る氣になつて居た。

電車のがたがた言ふ音などは、耳にも入らない。私は腰を掛けると直ぐ、又秋子の事を考へた。朝は、譯もなく思ひ浮べたのだが、今になると、もうまるで、飢た人の様で、考へずには居られなくなつたのだ。

不思議と今朝の先を考へる、……………その金曜日（と言ふのが五月頃のだった）が來ると、學校はうまく午後休みになつた、急いで歸つて來ると、暫くして目のさめる様に美しい秋子が來た。下宿の娘が、室に居ると、飛び込んで來て、吉田さんそら入つしやいました。と云ふから、わざと落付て出て行くと、秋子が、花が咲いた様な笑をして、一寸挨拶する。おあがんなさいと言ふと、可憐そうに玄關のわきの方に、三枚も重ねた、華美な鼻緒の草履を脱いで、シールを取つた。

二階の私の室に入つて、座蒲團をすゝめると、四邊を見まはして居たが、小聲で

「まあ、いゝお室ね」

と言つた。

私は何かしら、氣に入りそうなものを、皆取り出して、色々な話をした。秋

子はその度に笑つて、嬉しいと言ふ様な風をする。それがもう何より私には嬉しくつてたまらなかつた。

そうこうする中に、時が経過してしまつた。秋子はふつと氣が付いた様に。

「あなた、植物園はもう遅くならなかつて？」

と云ふから、その日は、秋子は吉田さんと言はなくなつて、あなたと言つた。

「まだいゝでしょう、今から行つて見ましよう。」

と、出かけ様とすると、秋子は、

「あのね、私ね、お土産を持って來ましようよ」

と何か取り出した。

「僕に？それは有難う」

と見ると、造花の薔薇の花籠と、菓子の鑑であつた。秋子は自分でその花籠を書棚の上に置いてくれた。その花籠はそれから久しく其處に置いてあつた――

それから二人して小石川に出かけた。  
もう少し遅かつたので、それに其日は、日曜でも、土曜日でも無かつたので  
植物園はひっそりして居た。

廣い原の様な、花圃の中を歩いて行くと悠々とした楽しい思ひが湧いて来る  
様だ。

秋子はこんな事を言つた。

「静かでは、人が居なくつて……………」

と、こんな事を考へて居る中、電車が、勢よくお茶の水の坂を下る。やがて新  
諏訪町に着いた。私は降りて平常の道を通りながら、歸つて来た。

歩きながらも、今でも秋子は、昔の様に若くつて、二人の仲が昔の様に暖か  
く、障害がなく、私は本郷に居た時の様に、毎日秋子のなつかしい手紙が来る  
様な心持がして居るのだ。そして、昨夜の榊原の殿様の庭を、思ひ出すと、先

に植物園に行つた時と、同じ様な嬉しい思ひがされる。夢じやない。昨夜疲れ  
て寝たあとの夢だとは、決して思へない。

そう思つて、今日も私の留守に、例の桃色の状袋の手紙が来て居て、何處か  
に一所につれて行つてと、書いてありはしまいかと、心待ちに待たれる様な氣  
がする。それで急いで歸り着いた。

新小川町の下宿——私はまだ下宿住をして居るのだ。素人下宿だが——に歸  
り着いて、入口を開けると、家の細君が、

「吉田さん、お手紙です」

と言ふ。私は非常に嬉しかつた。想像が當つた様な氣がして、靴を脱ぐと、そ  
れを受取つて、直ぐ部屋に入つた、平常の自分の部屋ながら、何だか楽しく思  
へる。先づと、荷物を其處に置いて、大切そうに手紙を出して見た。すると、  
「何だ！」



と、投げ出してしまった。

亂暴な書き振りの、見るから汚ない……それは某といふ田舎の人からのであつた。

私は甚だしく失望してしまつた。それと同時に、非常な淋しさを感じ初めた、何だか自分の身體の四邊が荒寥として、孤獨の思ひが強く泌み入る様だ。するど又耳のあたりで、

「お前は、何の爲めに生きて居る！」

と言ふ聲が聞ゆる。

私は突立つた。……あゝもう六年も過ぎ去つてしまつたのだ！……と思ふと、急に何とも言へぬ力が、吾々の身に加へられて居ることを切に感じた。これが運命か！……と思つたが、此時初めて夢が醒めた様な心がした。すると、止めどもなく涙が流れる。私は其夜、獨で泣けるだけ泣いて見た。

### 霧

晚餐の箸を置くと、二人で窓に倚り懸つて、外を眺めた。外はもう暮色が迫つて、そこらに薄く煙りが立つた様になつて居る。

高山の夕暮は實に何とも言はれない静寂なものだ。日が落ち掛ると、湖水から立つ水蒸氣に、山一體がしつとりとして、木の葉が露を帯びて来る。緑の色が新しくなつて、何處となく、ぼつと煙つた様に成るのである。すると、何處からか例の「赤はら」と云ふ鳥が、集まつて来て、金鈴を振る様な聲をして、一齊に鳴き出す。其聲が山中に響き渡る様だ。その中に坐つて居る人は、自然と幽な喜ばしい心になつて、静かに眞心を盡して慰められてでも居る様な思ひがするであらう。

それが、暫くすると、闇になる。鳥は皆、何處か飛び去つてしまつて、間として音もしなくなる。林は口を閉ざして黙した様だ。すると其中を霧が獨り、その力を顯はして来る。

晝でも高山の霧は、見なれぬものには、不思議である。それであるのに、この闇——この夕暮から一轉して、目たたく間に、人を殺す様な、寂冥に歸する闇の中を、表はれたり、消え去つたりする霧を見ると、丁度他界の靈魂が、闇に乗じて縦横に往來して居る様に思はれる。

私達二人は、今夜も鳥の聲に聞き惚れて居たと思ふと、間もなく、其闇が目の前に迫つて來た。二階の欄に倚つて居ると、空にかすかに薄明がして、この湖水を取り圍んで居る外輪山の頂が、わづかに境を劃して見ゆる。その黒い巨大な姿が、空に密接して何か相さゝやいで居る様だ。

この闇に向つて居ると、二人は何か襲つて來るものゝある様に思へたが、や

はり、そのまゝの姿で、最前からの話を續けて居た。すると將して例の霧が表はれた。

黒檜山と言つてこの赤城の外輪山の中、第一の山である、その黒檜山の中腹に、白いものが浮んで居る様だと思ふと、やがて其廣さが増して來て、次第に麓の野を包んで、大沼の湖畔にある林を隠してしまつた。と見る間も無く、その恐ろしい白いものは、私達の家の方に押しよせて來て、見て居る間に窓の前の凡てのものを隠してしまつた。

見なれて居ても、此の様な光景には、自然の大威力を感せさせられる。私は友の顔を見て黙したまま、欄から離れた。友は直ぐ跡を閉めて、私の向に座つた二人は燈火の下に對ひ合ひながら一種の沈黙を守つた。

暫くして友は、荷物の中から小さい帳面を出したが、私の顔を見て淋しい笑ひを含みながら、

「君これを一所に讀みませんか」

と言ふから

「それは何です」

と聞くと

「亡なくなつた姉あねの日記にっきですよ」

こう言つて、友ともはいさりよつた。しかし直すぐその帳面ちやうめんを見ようともせず、こんな事を話はなし出した。

「姉あねは十六じゅうろくの時に亡なくなつたのです。これを見ると丁寧ていねいに其日其日の事がつけてあるから、私達の子供こどもの時にした事が、細々こまごまとわかるのです。私のした悪戯いたづらなども残のこらずありますよ」

こう言つて、暫しばらくく口をつぐんだが、獨語ひとりごとの様に、

「姉あねは實際じつさい僕わがを可愛かあいがつてくれたな……………」

と言つて、にはかに私わたしの顔かほを見て、

「姉あねはそれに畫かかうまかつたですよ。勿論もちろん日本畫にっぽんがでしたがね……………」

私は何なにとも返事へんじをせずに、たゞ友ともの顔かほを見まもつた。友ともは號ごうを左愛さあいと言つて有望いうぼうな青年畫家せうねんがだ。私わたしとは年も同じ位くらいだし、心こころも合あつて居ゐるのか兄弟きやうだいの様ような思おもひがされて、交まじはつて居ゐた。けれどこの幾年いくねんかの間に、友ともはこんな事を言いひ出した事は、一度いちどもなかつたのである。

それから、左愛さあいは色々いろくと家族かぞへの話わ、祖父そふになる人の事こと、父ちちになる人の事ことなどを話はなして、まるで、何か追懷つひかいの情なさけに迫おられて、一種いっしゆの寂さびびしさに囚こはれた人の様ようになつた。

この左愛さあいと言ふ人は、一體いったいが静しずかで正直しんじつな人ひとだ。藝術家げいじゆつによくある様ような、一種いっしゆの感情かんじやうの興奮かんげいに刺撃しげきされて、盲目的まぶたふになる人ひとでは無いので、常に謹つつしみ深い、平和へいな人ひとである。その人ひとが、今夜こんやは思おもひも掛かけず、情なさけの烈はげしい顔かほをして見せた

ので、私は驚いた。しかし、何か常になく二人の心が親しく相觸れた様にも思へて、なつかしくもあつた。それで私も一心になつて、その話を聞いて居た。二人の顔を燈火がてらして、何とも言へぬ懐しい、淋しい色を籠らせて見せた。すると不意に（其時は不意にといふ様な心持がした。）障子を開けて、この家の若い細君が入つて來た。二人は妙な顔をして、一所にその人を見ると、細君は、はつと思つたと言ふ風に、

「何か、お話でしたの」

と遠慮らしく言ふ、

「いくら、例の様な話をして居たのです」

と私が言つて、快活らしく、笑ひ掛けた。左憂は急に横を向いてしまつて、細君に其顔色を見られるのを避ける様にしたが、細君は私の笑ひにつりこまれたのか、大きい聲をして、

「木村さん、面白い事があるのですよ」

と左憂に言ひ掛けた、すると、左憂はそれを遮つて、私に

「君、大沼に行きませんか」

と言ふ

「行きましよう。お光さんも行きませんか」

と誘ふと、細君は話しかけた事も忘れてしまつた様に、

「ね、参りましよう、丁度月も出ましたから」

と、三人で家を出た。

霧はいつか消れてしまつて居た。露が降りて居る、草の中を通つて、林をぬけると、湖畔に直ぐ出られるのである。

左憂は黙つて、まづ先に立つて行く、私はお光さんを中心に、後から歩いて行つた。

私は今夜は心が非常に安らかだ。こう言ふ日が多ければ、人間は極めて幸福であらふと思ふが、静かに満足が得られて居ると言ふ心持で居るのだ。だから左愛の話も、取りわけ身に沁みて思へるし、お光さんのする事も、少も嫌だと思へないのであらう。全く有難い程、「我」を隠くして居られる晩であつた。

私達は湖畔に出た。

大きくさしかゝつた、山梨の樹の下を通つて、汀に出た。水に向つて立つて居ると、左愛は初の通り黙つて居る。お光さんは初め二語三語、話して居たがこの静けさ(静かと言つても、それはこの湖畔の静けさは充分に言ひ表せないが)まるで、自分達のかすかな呼吸さへ、この静けさを破りはしまいかと思へる程の静けさに、引こまれて、黙つてしまつた。

月は薄く光を落して居る。林はたい黒く見わる。湖心にある島も黒く、水面は薄く月光を漂はして居るが、深さを計る事の出来ない様な恐ろしい色を見

せて居る。風もない。

私はしやがんで、水に手をひたして見たが、思はずも四方の山を見廻はした。その時、左愛は思ひ沈んだ様な風をして、右の方、黒檜山の麓の方に歩いて行つた。私は何心なく其を見送つて居ると、ドボンと湖水に石を投げた音がした振り返つて見ると、ゆらゆらと波紋が広がつて行く。私は覺わすお光さんの顔を見た。

まるで人も山も、この自分達の立つて居るも忘れてしまつた様な顔だ。

何か見つめて、唇を慄はして居る様な顔だ。見つめて居るものは、心の内のものであらう。今お光さんの眼には、何物もこの目前の自然は形をなして映つて居ないにちがひない。——と思へた。

私は驚いたが、黙つてそれを見守つて居た。恐らく聲を懸けても聞わまい。こうして居ると、霧が何處からとも無く顯はれて来て、向ひ岸の林を包んだ、

と見る間に、湧き出る様に、湖の面に廣がつて、今まで見わて居た湖水を、渺茫とした大海の様に見せた。濛々とした白い霧の足は、次第に近づいて来て、湖心にある島が隠れると、兩岸の林も包まれてしまった。——山も——そう思ふうちに、こゝに立つて居た私達も、いつか其白いものの中に巻きこまれて、月も見えず、星も見えず、すぐ傍のお光さんもわからなくなつた。

この時、私は自分獨り、無限の大洋の中に捨てられた様な心がした。

左愛の足音は、次第に遠ざかつて行くのが聞えるが、その姿は霧の中で見えない。

私は不思議なものに出遭つて、茫然として居る様な氣がして居たが、そのうち、霧は何處へともなく消れ去つた。先づ空が見えたと思ふと、林の梢が見える。島が見える。山が見える。——こうして又星が燦爛として輝いて居る。

私は立ち上つて、足音を盗んで、二三步左愛の跡を追はうとしたが、思ひか

へして止めた。見上げると黒檜山が眼前に聳わて居る。その黒い巨大な姿が、何か心に新しく迫つて来る様で、夜の氣が心を襲つて來た。

夜は凡てのものが、その心を露に表はして、相叫んで居る様だ。山と山とは相近づき、林と林とは浮び出て、空も低くなつて山の上に懸り、日光の下に沈黙を強ひられて居た、晝を送つて、今は各々の満腹の思ひを叫ばんとして、相迫り合つて居る様だ。

こう思つて居るうち何時か、お光さんが私の傍に来て居た。

「何を考へてらつしやるんですの」

と言つた。私はそれにはかまはずに

「静かですね」

「でも、淋しいではありませんか」

「何か方々で、山や森がものを言つて居る様だ」

「わー」

と私の顔を見たが、急に身體を慄はして、何と思つたか、

「木村さ——ん」

と左愛を呼んだ。

暫くすると、林の中から、左愛が出て来た。三人してまた露のをりて居る草の中を歩いて歸つたが、もとの室に座ると、私は皆の顔に別々の愛の表はれて居るのを見た。

## 木 枯

これは私が雜司谷に居た時の話だ。——たしか十二月の中頃の事であつたと覺て居る。何でも凄い音をさせて、木枯が吹き荒さんで居た。その日は非常に寒かつたので、學校は休んでしまつて、一日家に閉ぢ籠つて居たのである。

一體冬になつて嵐らしい風の音がすると、何となく心細く、おびやかされる様な心持がするもので、同じ一家の中でも、別々に居ると、たよりなく思はれて、覺えず一室に集まつてしまふものだ。

その日も、その様に恐ろしい音がして、風が吹くので、家の人達は火燧に入つたまゝひっそりとして居る。

時々、風に吹かれて雲がとぎれると見わた、力がない日光が、ぱつと障子に

映つて、四邊がはつきりとなる、そうかと思ふと、又灰色の雲が空一ぱいに廣がつて、薄暗く、其處らが沈んで見ると、心細くおしつけられる様になる。其間を木枯が断續して音をたて、居るのであつた。午餐後であつた。私は茶が飲み度くなつたので。火燧のある室に降りて行つた。すると、家の人達は、皆一所になつて火燧にあたりながら、何となくをどくして居る。

私を見ると、此家の主人の老爺がまづ

「如何です、まあここにね入りなまつて、お話でも聞かせてくださいませんか」と言ふから、私も別に用もなかつたので、其處に坐はり込んだ。すると、この老爺の姪に成る娘が——ことし十六だと言ふ——

「山本さんは、あのう、こんな日獨で居て、お淋しくは有りませんか？」  
「やつぱり淋しいね、お常ちゃん見たいに」

こう言つて、笑ひ掛けて見たが、何時もよく笑つて騒ぐ筈のお常が、今日はたゞ軽く笑つただけで、うつむいてしまつた。

又一しきり、森の太木に風があたる、烈しい音がして、枝が折れた。こゝでは皆黙りこんで顔を見合せながら、そつと呼吸をして居る。その姿は、戸の外まで襲つて來て居る敵から、隠れ様として居るもの、様だ。

暫くすると、老爺が口を開いた。——この老爺はまだ六十には成つて居ないが、額がはわ上がつて居て、赤味を帯た顔が瘦せて、皺が薄く成つて居る。話する時には、其小さい眼で持つて、一寸人を見ながら、落付いた聲をして話し出す。其間には、烈しく咳が出る、それが癖の様だ。その度に、茶を一口づゝ飲んで、又話し出すと言ふ様な、老爺である。それで談話が大好きで、誰れかをつかまへて、何時も話し込んで居る。

「お常、昔な、おいらが若かつた時に……と言ひかけながら、私を見て、



一寸笑つて見せた。娘は黙つて、じつと老爺の顔を見て居る。  
 「その若かつた時にな、こんな事があつたよ、そうだもう四十年も前だらう。  
 やつぱりこんな日さ、をいら板橋の處に家があつたんだが、寒いからじつとし  
 て居ると、戸をとんく、くくくこたゝく

(誰だ！)

と言つても、返事をしねいで、やはり戸をたゝくのだ。變だと思つて……

此時、娘は不意と後を向いた。其拍子に老爺は話を止て、

「何だ？」

と聞く、娘は

「誰れか來はしなくつて？」

と言ひながら、後を向いたまゝ身を縮めた。老爺は

「誰れも來やしねいよ、こんな日に誰れが來るもんか」

と言つて、又話出そうとしたが、例の咳が出たので、顔をまづ赤にして、脊を  
 まげて苦しがつた。媼は直ぐ立つて脊をさすつてやつた。

その時、表で人の聲がした様だと思ふと、閉めよせてある戸を叩く様だ。  
 皆ふつと聞き耳を立てた。

暫くすると、此度はやゝ明瞭と、女の聲がして、

「御免なさい」

といふのが聞けた。

それを聞くと、お常は

「ほら、ほんとに誰かよ」

と言つたが、小さくなつて火燵にかちり付いて居る。すると老爺は、

「お常、早く行かぬいか」

と言つたので、お常はこわく立たうとすると、媼は笑つて、お常にまあいゝ

よと言ひながら立つて行つた。

戸口の處で、何か話し聲がして居ると思ふと、媼が来て私に、

「山本さん、あなたにお目には掛り度つて、女の方ですよ」

「誰れだい」

坐つたまゝで、聞くと、

「何時も入らした事のない方で、二十恰好の」

「名は？」

と言つて見たが、媼はたい驚いた顔をして居るので、私はそのまゝ表の方に行つた。

この咄嗟の間には、誰れが来たのか、如何しても思ひ出されなかつた。障子を開けて見ると、

「やあー」

と覺せず聲を立てた。思ひ掛けない人だ。美津子と言ふ、一昨年、ある處で知り合になつた女だ。

私は驚いたので、上れと言ふのも忘れて

「どうしたのです？」

と妙な事を言つた。氣が付いて、二階の自分の部屋に上げた。

坐につくと、久瀾な挨拶をしたが、私にはどうもふに落ちぬので、暫くの間双方とも無言で相對した。一體この美津子と言ふ女は、一昨年私が永く病氣をしたあとで、春の暮の事、小田原の海岸に行つた事がある、その時に、私の下宿した家の、遠縁のものだと言つて、来て居た女だ。東京に長らく居たと言ふ話で、何でも本郷あたりの病院の看護婦であつたらしい。

何でこの田舎に来て居たかは、知れなかつたが、とにかく、そんな境遇に居た女にしては珍らしく、悪るすれがしすに、をとなしいので、私も、種々の事

を頼んで親しくした。

こんな事があつた許で、その後東京に歸つて、一二度、書信の往復をしたばかり、別に心に残つて居る人でもなかつたのだ。

まあこれ位の人だ。それが不意に、しかもこの嵐の日に來たのだから、私はどうしても、ふに落ちぬのである。

暫くすると女がこういつた。

「今日は、私不意と伺ひましたので、先から一度は是非とも伺ひ度いと思つて居ましたのです。それに此度は急に國に歸らねばなりませんので……」

「そうですか、お國つて、ごちやうです。」

と言つて、女の顔を見ると、三年計りの間に、こうも變るものか。顔一ぱいに何とも言へない淋しい影がさして居る。額から頬にかけてが青くやつれて、その上に勢のない暗い色が見ゆる。唇の色は血の氣が無くなつて、鼻の邊も瘦せ

が見ゆる様だ。

一體から黙つて考へ込んで居る様な顔だちであつたのだが、前に遇つた時には何處か活々とした、少女らしい血色をして居たので、それが調和して、如何にも懐かしいと言ふ様な思ひをさせるのであつた。それがどうだらう今見るとまるで砂漠の中を旅して居る人の様だ。

私はこう思つて暗然とした。

するとその聲までが、暗愁を含んで居ると思へる様な調子で、

「國でございませるか、遠うございませぬ、北海道です」

「それは寒い處ですな、身體にさはりはしませんか」

「わゝ、私もう、今でも病氣でございませぬもの」

「それはいけない、どんななのです」

「脊髄が悪いので御座います」

と言つて、何も隠しはしないと云ふ様な眼付をする。この瞳だけは昔のまゝであつた。長い睫の下でやさしい光を持つて居る。

私は引き込まれる様な氣がして、憐れになつた。見ると衣服も、何處となしに、しなへて、古びて居る。きつと苦しい境界に居たらうと思つと、身の上を聞いて見たくなつた。

「あれから、何時頃まで小田原にお出でした」

「は、あの年、一ばい居ました」

「それから」

「こちらです、また本郷に」

「本郷は何處です」

「病院ですの、先居ました」

私は一寸話をとぎらして考へた。私が黙ると、女も黙つてしまふ。私は又

「お家は先から北海道ですか」

「ね、彼方には私の五つの時に参りましたのです」

「そうですか、そしてあなたは何時ごろ出て来たのですか」

女は一寸笑つて私を見たが、うつむいた。しかし別に隠さうともせず、

「十七の時ですの」

と言ふと、その頬にほのかに赤みがさした。その色はまるで、昔の夢を思ひ出させて、消れ去つた虹の様だ。私はそれがわけて憐れに思へた。

「もう四年になります。こんな事、思ふと何時も譯がわからなく成つてしまいますのよ。初めは勉強が仕たい一すで、随分、無理をして出て来ましたのですが、今になると、もうそんな事、何で思ひ立つたかまるで夢見たいで御座います」

「そうですか、ちや小田原に行つてらした時は、こちらに来て一年ばかりし

てですね」

「わゝあの時は、あの家の叔母が悪かつたのですし、少し思ひ立つて試験を受け様と思ひましたから、暫く行つて居ましたの、その時、初めてお目に掛りまして、随分、色々の事を教へて頂きましたはね」

「なあに、僕なんぞ何にも知らないんですから」

「そんな事でも私は、此度國に歸りますと、もうとても出て来られまいと思ひます。それで、どうかして一度だけ、一度でいゝからお目に掛り度いと思ひまして、今日伺ひました。」

こんな話を仕て居る中、私は自然と心が落ち付いて、美津子を親しむ様な思ひがされた。女も少し心が安らかになつたのか、聲がはつきりして来て、顔に力がこもつて来た。

外の木枯も少し凩いだ様だ。すると、にはかに障子が明るくなつて、思ひも

掛けない、日の光がさす。女の淋しい顔もその光に助けられて、晴やかに見えた。

暫くは無言で居た。すると女が

「今日でも、お目にかゝれまして、私、何より嬉しう御座います。」

と言つてうつむいた。私は何とも言はずに、その顔を見つめて居た。女が又

「もし今日お目に掛れませんか、一生お目に掛れないかと思つて居ましたの」

「何故です？」

「でもそうでしょう」

何だか、妙に話工合がもつれた様だから、私はふつと、

「何時お出立です？」

を聞くと、女の顔が見る間に、初の暗愁に包まれてしまつた。

私ははつと思つたが遅かつた。

「明後日の朝のつもりです」

「激車ですか」

「わい」

と言つたが、言葉に暖か味を失つてしまつた。すると、口をひきしめて、淋しい聲で、女は

「もうおいとま致します」

と言ふから、

「まあいゝでしょう、まだ日は暮れないから」

と言ふと、女は又一寸腰を落ろしたが、どうも話が出て来ない。二人はたゞ對ひ合つて居た。

木枯が又はげしく吹き出した。空は一面に曇つてしまつて、暗く、寂しく、四方に黄昏らしい色が漲つて来る。女は思ひ切つたと言ふ風で、急に歸ると言

つて立ちあがつた。

私も無理には止めずに、二階を降りて表へ出た。外を見ると、烈しい風が縦横に吹きまくつて、樹の枝にぶつかるので、森の樹は聲を立て、泣いて居る様だ。

何となく、荒涼とした景色に、かて、空の灰色が、怪しい冷やかな色をして見わる、表に立つて、美津子は別れの挨拶をした。私は此時ふつと、思ひついて、急いで室に歸りながら、机の上に置いてあつた聖書を取つて來た。

「あ、これはお別れのしるしに。古いけれど僕の始終讀んで居たのですから」と言つてわたすと、女はふし目になつて、

「有難う御座います、では戴いてまゐります」  
と、呼吸をのんで言つた。

そして行つてしまつた。

私は室に歸ると、今ふいと眼前に顯はれて來て、消へ去つた様な、人の事を一心に考へた。

木枯は益々盛に吹いて居る、何處かで又枝が折れた音がしたと思ふと、落葉が飛んで來て、隙子にばたばたと當る。その音聞きながら、美津子の半生を想像した。想像して行につけて、私は深い悲しみを覺えた。

あの顔は、絶望の心を表はしたものだ——と覺えず叫ばうとした。

滅落——あの木枯に吹かれて飛び散つて行く様な運命だ——。こう思つてたいその人の爲めに、せめて此度の旅に不都合の無い事を祈つた。

しかし、よく考へて見ると、私はこの人の別れ去つた跡で、非常に其言葉が心に刻みつけられた。それから幾度か、美津子の事を思ひ出して茫然と考へた

。。。。。。。。。。

事がある。

私は何の爲めに此の様な思ひが起つたかを、いぶかしく思つた。——又美津子は何の爲めに私などを訪れたらう。

其後美津子は如何なつたか知らぬ。今はもう、それから十年もたつたあとだ。

## 晩 餐

食卓は出された。ランプの光が、机も本箱も運び去られたあとの、心淋しい  
 廣く冷やかに見える、この一間をてらして、はかなく見まはされてゐた中に、  
 煮物の蒸氣は、華やかに立ちのぼつてゐる。今無言の中から、自分達は醒めた  
 様に首を上げて、目と目を見合せた。誰の唇の邊にも、一樣におとなしやか  
 な微笑が浮んで来る。けれど、聲低く、重く、鋭い悲しみは、人々をとりまき  
 追つて来る様で、その暗、その唇、その頬の上に、かくさうとしてもかくせぬ  
 もがあるではないか。夜深けて、橋の上に、ゆるく流れる、河の音を聞く様  
 に。月下、廣野をすぎて行く風の音の様に。

坐は、それ／＼の便宜にまかせて定められ、三人は軽く箸を取つて、卓上の

ものは、自分達が初めて、一緒に住む日、不器用な自炊の夕から、好み親し  
 んだもの、牛の肉と、馬鈴薯とを煮たので、そのわきには、誰も嫌ひのない甘  
 い煮豆、この粗末な、貧しい餐應の前に、三人は幼児の様に喜んで向ふのであ  
 る。

卓も、皿も、茶碗も、すべて、幾年か見なれたものである。自分達はこの彩  
 もなく、偽りもない晩餐の卓に幾年か、なつかしい思ひ出の歴史を築いて来た。  
 心ない一日の興は、幾年の消ぬ思ひ出となつて、今、遙かに見える過去は、  
 清く美しい、うすもやに包まれて行く。それを見送つて、樂しげな微笑、苦し  
 い悲しみを取り難た思ひは、いつも胸の底から湧く様にして来るのである。此  
 晩餐の卓に三人で、箸を取つたのも、やがて長い思ひ出の一として残るであら  
 う。

今日、自分達は、日曜の禮拜に行つて、教會で、例の通り出逢つた。禮拜が



すんで、そこを出る時、友は自分を誘つてくれて、三人がこゝの家に集つたので、その道すがら友は、今夜こゝで久しぶりに三人で晚餐をし様と云つた。この家に最後まで残つてゐた、一番年上の友も、友がその學校を卒り、花が落ちて果實になる様に、戦ひと呼ばれてゐる世の中に、ふみ出すと、この家を去つて移ることに成つた。この家の人、自分達に仕へ、いたはつてくれた人々も、それと共に、その荷物をまとめて、こゝを去るといふので、吾等が年久しく迎へられ、待たれるものゝある様に思はれてゐた處、安らかな思ひのまゝに我家にも似たものとして、往き來してゐた處は、空しくその魂をぬき去つてしまふのである。その終りの紀念にといふので、今夜の晚餐の卓は備へられた。自分達は、無言で、常のまゝに箸を取つてゐる。人々の心が極めて事なく、静かな夕は、いつもかうであつた。年上の友は、箸の上の方を持つて横にしてその肉を飯にそへながら、急ぐ心も無さうに口に持つて行く。中の友は、身

體をすこし曲めて、乳をすふ様な口つきをして食べてゐる。此等は、長い間、見なれた友の習であつた。やがて肉ははいつくされ、薯もたゞ二つ三つ皿に残つて、脂と澱粉とで、濃くされてゐる汁は、コーヒー色をして、その薯を漂はしてゐる。新しく、すがすがしい、青づけの大根の色と、音どが快く、終りの茶の香がなつかしく、遂に食事は終つた。心満ちて少しく疲れた様な色は、人々の顔に上つた。何時も、興が湧き、話が榮々するのは、此の皿も、箸もそのまゝな卓によつて、茶をすゝる時から起るのであつた。自分は、この時、つくづくこの室を見廻した。そして、このなつかしみ、安らかに坐る楽しみのあつた室も、今名残りの時になつてゐるのを思つた。残り物をしく、心ひかれる思ひは、隙子にも壁にもある。ことに、その隙子のガラスに残つてゐるいたづらがきはかつて中の友がした筆のあとで、その日そのまゝの墨の色ではないか。かう思つて來ると自分の胸の中に、幾年の移りかはりが

急しく往來する。自分は目に見ては消れて行くものゝ急しさと、華々しさに酔される様であつた。

自分達二人は、幾年が相倚つて、一つ家に住むで来た。丁度三年前、秋の風が吹く頃、新らしくこの家が見出されて、信濃から運ばれて来た荷物、相模の旅から歸つて来たはきかての椽でとかれ、三人はまた一つのねぐらに集まつた。二月も、相見ずして相對した時は、この交り古るした人々の顔にも、言葉にも、新しい力があつて、例へば、新しい花が咲き含んだ様であつた。久しく一つ家にあると、心と心と相接し、銘々はその明かな自分の境を去つて、相近づいてゐたのも、離れて住むまゝに、生れながらに築かれたその人々の傾きと、生れながらの力を示して、一人々々、明かにその色と光りとを表してゐた。その夜の興は如何に深かつたか。

その時人々が心勇まれて、各々机を据ゑたのはこの室と、隣の室と、も一つ

とであつた。その頃は、今の隣の家と兩方つゞけられてゐて、今の二倍の廣さがあつた。この二軒は同じ作りの家で、六疊が二間と三疊とである。その六疊の南と北とに向いてゐて、南は坐敷、北は居間といふ作り。この室は、その南の方の部屋である。一番年上の友は隣の家のやはりこゝと同じ部屋に机を据ゑる。中の友は、この隣の部屋、自分はこの部屋に坐つた。あゝ自分はこの部屋の一、番初めの主人であつた。そのころは、隣の方にいつも食事に出かけて行つた。そこでやはり今夜の様に、食後の卓を圍みながら、様々の問題が論せられた。今その一つ、一つを、思ひたどることは出来ないけれども、若い、勇氣のある、偽りない言葉であつた。その問題は、多くは文藝の上で、詩歌の批評はことに華やかであつた。こゝの一夕の物語の上に主人公とされた人は、夢にも都のこのかたほごりに、自分をその様に見てゐる人々があるとは思へなかつたらう。或る時は信仰の問題であつた。神を見たことのある人は、必ず思ふであら

う、その衣のすそと、その息のかゝる處には、必ず力を抱いて、眸に若く強い光をつゝみ、喜びが心をめぐるもの、あるのを、友はその時、その胸に種がまかれたのであつた。或る時は人生の問題であつた。戀愛の問題であつた。或る時は遙かに闇をすかして見る生活の問題であつた。

秋はやがて、柿の實に色づけ、新しい林檎を運んで來た。人々は力を盡して文藝の前に立つてゐた。自分はその静かな、なつかしい、境を今もしたふ。今も、もし夢が前にかへすなら、その道を歩むことを切に思ふのである。けれど、ここに一つの出來事があつた。

それは自分とどつて淋しく、苦しいものである。けれど、運命は人に疑ふべき餘地すらも與へずに、人を運んで行くもので、自分は、或る日、遂にそこから分離することになつた。温い部屋を出で、木枯に吹きさらされる様に、自分は、このたのみある園を去つて、淋しく寒い思ひの中に居を定めた。その時か

ら、自分はこの晩餐と、食後の興との坐の主人ではなく客になつたのである。月が、廣い前の運動場をくまなく照らし、その先きの森を、動き出す様に。見せてゐる時、自分は、旅なれぬ子が、旅立ちする様な思ひがして、思ひよわるのであつた。けれどこの心を友はしらす、自分も、吾を限りの思ひを、そのまゝにして、霧の深くかゝつた朝二十町ばかりの處に移つた。

その家は森の中の一家で、老人夫婦の隠居處、そのはなれの三疊が自分のであつた。かうして處は移つても、心は一つにつながれてゐた。すべての時、必ずその家のこの室に自分も交つてゐた。

春が來た。この家は縮小されて、今の一軒だけになつた、中の友は、自分の部屋に、上の友は、そのあとにかはつた。一年は自分の胸の中に、ことに疾走してすぎた。自分は、吾をわすれて、花の下に立つてゐた夢をさまされた。悲しい、いたましい、人の嘗める第一の鼠は來た。心の力を呼びかへすいとまも

なく、美しいものは奪ひ去られた。自分はそのいたみを抱いて、母に歸つて来た。それで、自分はこの家と、都の端と端とにまで隔つた。

その冬、中の友は、洗禮を受けた。そして冬の旅から歸つて来て、やがて、こゝを去ることになつて、また、自分の嘗てゐた、森の一つ家に移つた。それはたゞ互の便宜によつてせられた事であつたらう。けれど、この家の、みどり葉が秋風に吹きさらされる様な思ひがされた。たゞ、尙、残つた年上の友の室は昔のまゝに吾等の心を安からしめる處であつた。そしてあとに、新しい人が一人来た。自分は、その冬の日の光の様に、悲しんで、ふるねて、凍つて行くのかと思ひながら、また春に逢つた。新しい運命は、新しい春につれて自分を引いて行つて、昔はたゞ、かへり見て思ふものに成つた。そしてその時、上の友は學校を出た。

その前に幾度、自分達は、この部屋に集つたらう。中の友が去つて後、この

部屋は上の友のものとなつて、三人はこゝに昔の様に茶をすゝりながら、友が言ふ、問題に、實に實に、胸ををどらせたのである。友はその時、戦の前に望んでゐるので、自分達二人は、その道を思つて見ながら、半ばは、勇ましく、楽しいものゝ様に、半ばは、危くおそろしいものゝ様に、それゝの繪を畫いてゐた。

やがて時は充ち、果實はみのりして、友は一步世にふみ出した。かつて、自分達と卓を同じくしてゐた一人は、早くも戦ひの中に入つて行くのである。半ばは、夢の様に、半ばは現の様な思ひは、自分の胸にみちくた。

かうして一月、二月はすぎて、夏の初めの今日になつた。今日は、このすべての思ひの結びの日である。自分は、かつて、自分に來たすべての思ひを、くり返して見る時、今夜はたしかに、長い日の間、月を重ね、年を重ねて來て、かくなるべき時の終りの日であるだらう。一つ巢に育てられた雛のその翼がの

びて、その胸のあこがれる方に飛び去る時が来たのであらう。自分の胸の中の追懐にも、一つの境が出来たので、やはり結び目になつたのである。

今夜、三人はさして華やかな興もなく、静かに相對して居た。膳はいつか引き去られて、室はまた始めの様に、空室の淋しい姿になつた。たゞ幾年か相寄り相親しんで来た三人の顔が、ランプの光にてらされてゐるばかりである。自分分は、ふと、自分の思ひを止めて、人々の顔を見た。その時自分は、すぐ友の顔に表れてゐる、眞面目な成年の力を思はせられた。嘗て中の友が持つてゐたよく動く心は今静かにせられて、若々しい瞳にも何處となく人生の波動の影が見える。上の友はまして。華やかな夢が消えて、重く、雄々しい思々をつゝみ水を湛めた様な力ある姿になつてゐるではないか。吾等は不知不識の間に、この道にまで運ばれて來てゐたのであると思つた。三人はそのまゝ、暫く沈黙を守つて居たが、中の友は自分を見て微笑した。自分も年上の友もそれにつれて

微笑した。今は別れである。けれど三人の胸の上に、この過去を葬つて、それを追懐の國に送つても、自分達には、少しも苦しみを感じることは無いのである。このかりそめな、室につがなれた記念は、たゞ遠く美しい、薄絹の様な筒に包まれて、長しへに心の藏に置かれるのであらう。

夜はやゝふけた。中の友が歸るといひ出したのにつれて、三人とも仕度をして庭から出た。中の友は、門をすぐ右に曲つて、老人夫婦の居る、森の家へ歸つて行く。自分たちは左に、これから、二人とも遠く、この家を離れて行くのである。

## 鳥 聲

これも赤城山に旅した時の話だ。丁度今夜の様に雨が降つてゐた。遠く夜の寂寥を破つて、雨の音が人懐しく心淋しく聞るのであつた。氣候までその山の上では夏を知らないのだから、春の頃に似てゐるので、今夜などはその夜その儘の思ひがされる。

都を出てから五日目、一所に来てゐた友は、何か思ひ立つたので、急にその朝山越えをして二十里許さきのさる温泉に行つてしまつたから、私は日一日ぼんやりして、雨籠りをしてゐた。その少し肌寒い氣候の工合、しとしと降る雨の音、青葉の山を霧が包んで、外の景色も、自分の心も何となくぼんやりと見える様な、春の暮か五月雨の頃の思ひによく似た心持がしきりにされる日であ

つた。その夜の事だから、日が暮れてからの心細さ、人懐きさと云つたら、ものの譬へ様も無い位、その上友も居ないので、私は途方にくれる程、じれて了つてゐた。

勿論こんな時、私の様な我儘者には、静かな懐しい詩などは胸に入つては来ないので、たまに一句か二句、破壊的な馬鹿に痛快な句でもあらうものなら、それこそ涙のこぼれる程うれしがる位なものだ。

私は獨りでじれて、種々と手のつかない事をあれこれと仕てゐたが、何をしても心に染まないで、たゞ我儘な本心を募らせるばかりだつた。

「もう寝ちまはうか！」

かう思つて、獨り言をしながら、前の廊下に出て半分は無意識で二階から降り様とした。さうすると丁度、千代さんが急いで上つて来たので、私は降り口に無言つて衝つ立つてゐた。私を見て千代さんは、

「何處かへいらつしやるの、今からお話に上る所ですよ」

といふから、私は、

「さうですか」

といつて、悲しい様な甘ねる様な心持がして一所に引き返した。

室に入ると、にはかにランプが明るい様に思はれて、また心細い、小兒じみた我儘な思ひが、胸一ぱいになつて、もう仕方がない様に思はれた。小兒はそんな時、母に抱かれて乳をさぐるのが一番よい慰めだが、私は誰でも、私を心から抱いてくれる様に、やさしい言葉で包んでくれたらば、うれしかつたのだらう。

千代さんは例の無頓着な、晴やかな聲をして、私に何をそんなに、つまらなさうな顔をして居るのかと聞いた。けれど私は何にも曰はずに、たい千代さんを見てゐた。その夜、千代さんは何を思つてゐたのだらう。その顔には實に美

しい色があふれる様で、その瞳は光り輝いてゐた。唇に軽く浮んでゐる艶な微笑は、人の心を魅する様、私はこの人が、或は遠い昔の初恋の夢を思ひ浮べて、矜りに、その幻を畫いて居るのではあるまいかと、思はれた。

千代さんは、殊にみづみづしい聲をして、あれからこれ、これからそれと、樂しさに話を移して行くので、私はそれに引かれてその淋しい思ひを捨てながら、次第次第に懐しく、この人に引き寄せられる様に思はれた。

夜は殊に静かに。雨は間断なく降りついで、遠い獣の聲も聞えず、夜なく鳥も鳴かず、霧は家を包んで、見知る限りを閉ざしてゐる。ランプの光が、たい華やかに幻の様に。話は深く深く懐しみ思ふ胸と胸との呼吸があふ様に、同じ力と同じ調子とを籠らしてゐた。千代さんはその美しい瞳と、その美しい顔とをあはせて、ことに静かな聲に、懐しい限りの力をこめながら、悲しい美しい追懐を物語り初めた。私は机に倚りながら、それに聞き惚れてゐたが夜が大

分更けたのであらう、心に泌みる、外の音がうら淋しく、その少女であつた昔の幸と、人の妻となつて後の、薄命とを、かたみに比て行く人の物語が、胸にみなぎり響く様に思はれた。やがて、出る息と吸ふ息とが同じ鼓動を持つてゐる許りに成つた時、すぐ前の林の中で、けたましい鳥の聲が一聲。二人は驚いて面を見合せたが、互に安からず胸を躍らした。その怪鳥の聲に似たうとましい響が、二聲三聲、林の暗に反響して、遠く遠く、またもとの寂寥に消れて行つた。

二人の唇には脅かされた様な、判断のしにくい微笑が上つた。私は暫く無言であつたが、

「あれは何て鳥です」

といふと、千代さんは少し急がしく、心を静め様とする様な調子で、

「羯鼓ですよ、閑古鳥のことですと」

といひながら、その疎ましい聲の行方を見送る様に、窓の方を見てゐた。その心にはほしいまゝに興を破つたのを恨む様な、又ははしたなく垣間見した人をさげすむ様な思ひもされたらう。

話はたるみ勝ちに成つて、二人の間は早や千里も隔て、仕舞つた。たゞ耳から耳に消えてしまふ様な、かりそめな物語をして、夜の更けて行くのに疲れる様にも思はれ初めた。二人とも倦んで更らに、その夜の今すぐ前にあつた興を思ひ出さうともしなくなつた。

丁度その時、人があつて、この室の前の廊下を踏みならして過ぎた。私ははつと思つて、何となく軽しめられた様な怒りを覺えた。千代さんは、あわて、入口の障子を開けたが、半身を外に出して、

「あなたですか、まあ何時おいででした」

といひながら、後にも振り返らずに、その姿は外に出、て障子は荒くしめられた。



大きいその足音はやがて、下の方に行つてしまつた。  
私は後で獨り、千代さんの出て行つた跡を見送つて、ただかすかに不安の思ひが胸に浮ぶのを覺けた。

次の朝、起きて顔を洗ひに行くと、そこに丈の高い、口の大きい、鬚ある三十恰好の男が立つてゐた。その眸の冷やかさ、その大きい口のあたりに漂つてゐる驕慢、そしてその鼻の形の如何にも卑しうな心を表はしてゐる所、私は心にその人の始終を思ひ浮べるに少しも困らなかつた。それを見て、私は千代さんを初めて見た日の、その顔の淋しさうだつたのを思ひ出したが、たい私には、その間に人間の言葉の及びがたい、宿命をつゝんで居ることを思はずにはゐられなかつた。それが例へばこの山にある湖の底のしれぬ様に、たいそれに臨んで、かすかに透かして見るものゝ、恐ろしさといたましさと、様々に曲折してゐる事を思はされた。その意と意との相戦つてゐる二人を思つてゐる時に

青い顔をして、恨みを含んで、心の亂れを包みかねて、寝なかつた千代さんが来た。千代さんは私を見ると静かにそして嚴かに一禮して行つた。

やがて爐の邊を通ると、この家の下男や、麓の村の草刈りとおもひ四五人も寄つてゐたが、留といふ下男が私を見るとすぐ大きいあくびを一つして、その野卑な顔に、珍しいものを見た後の様な思ひをさせながら、隣の草刈りに、昨晩の夢はどなただつたと聞いてゐた。私にはそれがたいその顔に讀みにくい感を包んでゐると思はれた。

千代さんはその朝から少しももとの様に、來なくなつて、私の室は益々淋しくなつた。妻木氏、千代さんの良人はたい思ふまゝに、倨傲な、いとしくはしたない思ひを露はして、私に見せるのだつた。



越けて四日、友は遠く歸つて來た。私は實に蘇生した思ひをして迎へた。室に入つて坐につくと先づ友はかう言つた。

「君、大變だつたね、僕はもう途で聞いたよ、とにかくと思つて急いで來た。しかしあの夜、ハスバンドは、此の下あたりで久しく立聞してゐたさうだ。それをねあの留が、酒を飲みすぎて心持ちをわるくしてゐたので、あの晩に限つて夜半に用たしに起きたんださうだが、丁度出會したのださうだ。それで、後ろからいきなり旦那と呼ぶと、非常に驚いたつていふよ」と。

私はそれを笑ふことも出来なかつた。

## 春　宵

「何をさがして居るんだ？」

親切そうな、年さかりの男が、立ちよつて娘達に聞いた。にぎやかな本通りから少し入つた町の、片側は嚴めしい屋敷の板塀、片側は小賣商人の店が、淋しそうに並んでゐて、貧しそうなその燈火が、よくもどかぬ處に、工場歸りらしい五六人の娘達が頻りと何かさがしてゐる。

春の夜、桃が咲いて、なつかしい星が夢を見てゐる様な、空を吹く風も、町を吹く風も思ひをこめて、始終喜んで人に戯れかかる様な頃だけれど、今日は私には學校で、始終逢つてゐる友達の顔までが不満足に見えて、何か大切にしているものでも失つた様な思ひが頻りされる日だつたので、何ともあてなしに、

ふくれて、じれて、歸つて来る途中に、ふつと偶意めいた此の光景に出逢つたのだ。

それを見て私は何の氣もなしに、立ち止まつた。その娘達は髪が亂れ、勞働につかれてゐて頬にやさしい色もなく、品もなく早口に何かいつて居る。年さかりの男は、あてもなく同じ様な姿をして、薄ぐらい路を見廻はしてゐたが、また

「お前達、何をさがしてゐるんだ？」

どかさねて聞いた。娘達は一齊に首をあげて見返つたが、別に返事もせず、互に顔を見合してまた下を捜し出す。私はそれを見て、夢がさめた様になつた。何か、胸に思ひあたる様な氣がして、急ぎ足に歩き出した。歩きながらほんとに何をさがして居るのだらうと思はれた。

實に春は空想勝な心を募らせる、天も地も物珍らしい、生いたちの姿に、暖

かい若々しい思ひを籠めて、魅する様な、微かな響が常に波うつ静かな空氣に傳はつて来る。無から有が生せられる様な、成長する姿を見ると、そのかすみの奥、微かな響の傳つて来る遠い國に、人の見る事の出来ないものがあるのかともおもはれる。春の来る度に私の心に浮ぶ様々の思ひ、私の胸に起る波濤はその見えないものを見たいと思つてあこがれて居るのではあるまいか。

「お前は何を捜がしてゐる？」

といふ言葉は、私に久しい前から問ひ懸けらるべきのでは無かつたらうか。

野に迷ふ羊の様に、たゞ力ない瞳をあげて、はぐれて来たものに行手を見て、弱々しい聲をあげて、その伴を呼んでも、空は、雲は、流れは、遠くつゞく若草は、やさしく答へ導いてくれるだらうか。

春の形ない追懐は、人の心にかすかに残つてゐる、過去の記憶ではあるまいか。もしこの現在が旅であつて、昔、吾等の魂の住んでゐた國があり、過去の

世界があつたらば、その世はこの春の様な夢と夢をつなぎ合せて行く、安らかな歡樂の國であらう。その遠いかすかな記憶を聞くために耳をかたむけ、眼を視はつても、現在の肉體からは聴き得られないので、この悲しみと、心淋しさか、春の心に大波をさわがせて静かな心を擾されるのであらう。私はも一度「お前は何をさがしてゐる？」

といふ言葉をくり返した。

私の道は右に折れた。ここからは、屋敷町に入るので、真直むこうは急な坂両方からおひかぶさつてゐる樹の木下暗で、奥深い洞の様、その坂の下に白熱の瓦斯が一つ、その光の廣さを畫して夜の更けた様に淋しく見ゆる。私はそこから左に曲つて行くのである。

そこからは廣い運動場のわきを通つて、細い長い生垣の道を行くのだが、こゝまでは瓦斯の光もとよかず、暗い道に自分の朧げな影も消れてなくなつた。

丁度運動場の所に来ると、私の前の處を、誰れか運動場の垣の方に入つて行つた。その黒い影の様な後姿が、ふつと見ると、消ゆる様に見えなくなつたので、私は覺えず立ち止まつて、暗をすかして見た。或は私の眼のあやまりかもしれぬ。心の中の思ふまゝな空想が内から眼に映つて、その假像が暗に見えたのかもしれない。けれども、私はその時、誰れかの黒い影の様な後姿が消ゆる様に入つたと思つた。それを見て私は益々この思ひに心ひそめながら、薄暗い細い生垣の間を通つて来た。全く人間には現在の世と過去の世との消息があると固く思ひ乍ら歩んで来た。

春の宵、暖かくなつかしく、うす曇りのした空の下に、薄い外套の着心地がよく、しつとりした空気を吸つて、私はたゞ自分の極めて幼い時の事を思ひ出そうと勉める様に、心をあつめて考へた。考へて歩いた。そのうち道は右に曲り、左に曲つて、私はやがて、家に歸りついた。一寸立ち止まつて入りか

ねたが、門をあけて、格子をあけると、中でどつと笑ふ華やかな聲がした。

### 赤城の牛

赤城山の頂上の旅館に着いてから三日目の朝、友は小沼の方に行つて見ようと云び出した。友は私よりも十日許りも早く此處に来て居たので、隣もない山上の此の一軒屋に、獨りで居た間の長く感じられた事は、二月も三月も人に逢へなかつた様であつたと云つた。それで昨日も、一昨日も、この家の周囲の原に行つたり、すぐ近くの大沼の畔に出たりして景色は付けたりに、草の上になねろんで話に實がいつてしまふのであつた。

そんな事をして、この二日は思ふままに暮したから、今朝は此處から少し離れて、小沼といふ、この大沼よりは少し小さい湖があり、その湖畔に乗ねて噂を聞いて居た、大さんと云ふ面白い老父の小屋があるといふので、其處を訪れ

様と云事になつた。

小沼に行くには、裏の細徑の方から上つて行くので、私達は此家の下駄の、重くつて、細の鼻緒のすがつたのをはきながら出かけた。藪の様な中を通ると道はやがて櫟、白樺の林の中に入った。雨に洗はれて居る樹の根が、道にはびこつて居る。それを踏み越わながら、林を出ると熊笹が繁つて居る。水の流れた跡の、石が露出して居るから、非常に歩きにくいのを、色々にして上つて行く、峠の様な處に出た。友は先に立つて、左へ小さい躑躅や、柴や、雜草が一面に生へて居る方へ降りると、わびしい、裸體のまゝの死骸の様な、小沼は目前に横はつて見えた。其岸は、粘土の様な赤土で、焼けた様な赤黒い石がごろ／＼して居る。汀にさし掛つた小枝もなく、懐かしい蔭もないのが、ふと見た目にも、物凄く、淋しく感じられた。其を立つて見ながら、私は覺えず「君、いやにすごい湖だね」

といふと、友は一寸見返つたが、不意に大きい聲をして、

「あ、見給へ、牛が居るよ、牛が一」

といふのだ。何處かど、見ると、左手の岸に、牛の群が水を飲んで居る。

今上つた峠の續きの草山が、南の方からの黒檜山の末と行會つて居る處、私達の立つて居る下から汀が曲つてその山に従つて行つて居る處に、三十疋ばかりの牛の群が集まつて居る。その牛は、乳を採る爲めに、此處に放牧してあるので、西洋種の美しい毛並のが、白、飾色、斑、と一團になつて草野の方から降りて来て、汀に佇んで居るのらしい。中には子牛も見えた。

私達も汀に降りた。水底は貝殻を焼いた粉の様な、灰色の砂らしいもので、その上を碧い清い水がたゞへて居る。其處から右の方に二町も行くど、鶏の聲がして、大さんの小屋の屋根が見えた。

小屋は、荒木作りに葎がさげてあつて、狭い入口から烟が漏れて出て居る。

「大さん、居るか」

と云つて友は入口に立つと、中から、

「大さんは今朝がた、地蔵に熊笹が出たといつて行きましたわ」

と、しわがれた聲がした。

「そうか、留守か」

と友が云ふと、

「まあ、入つてお休ませい」

と云ふ、友は私を振り返つて見たが、入つてしまつた。私も續いて入ると、爐にくすぼりながら火が燃えて居て、正面に痩せた白髪の老爺が煙管を咬へて居る。貧しそうには見ゆるが里めかしい衣服を着て、鼻の長い、頬のこけた、その目には卑しい光が宿つて居て、齒の無い口もとに人に媚びる様な笑を見せて居る。小屋は一方土を掘り下げて、それから廂を掛けた様にして立て、ある。中は

六疊ばかりの廣さ、床と云ふ程でもなく、地上に藁を敷かないだけにして、爐のまはりには、野犬の皮が敷いてある。其處邊に獵具、什器が取りちらしたまゝ、爐にかけてある鍋には何か煮わて居た。爺は一寸私達を見たが、煙管を置いて茶を汲みながら、

「まあ、休んで居なせいよ、そのうちに大さん歸りますすべい」

と云ふ。其爺を見て友は一寸眉をひそめたが

「また来よう」

と私につぶやきながら、爺に

「大さんが歸つたら、また来るつてそう云つてくれ」

と云つて小屋を出た。私もついで出ると、湖の方で牛が啼いた。

私達はまたもとの汀まで出ると、汀に居た牛の群は、何かに驚いた様に、密集して居たのが少しく廣がつて、動き初めた。二三疋は向岸の方を傳つて、急

いで歩き出した。その後から、子牛が四五疋、駆け出して續いて行くのが見える。それを見て居ると、何となく、静かに群れて居た牛が、異なるものを見て其静かな心が破れたのらしく思へた。私達は其儘歩いて來ると、群の中から、こちらに向つて、大きい白牛が歩き出した。それに續いて、二疋三疋、そろそろとついて來る。其時、群の中の一疋が高く啼いた。その聲がこのわびしい湖に響いて四方の山に反響すると、向岸のが歩みやめて、それに連れて聲を立てた。私は何となく獸の野性に對する恐れを感じさせられながら、友に「どうしたのだらう」

と聞いたが、その答のないうちに、私達の立つて居るすぐわきの藪の中から一聲、荒い胸をふるはせる様な聲がして、四つの足で枯葉をふむ音がかさ／＼と聞けた。すると、群の中からも又一聲。

私達は立つたまま、動かすにあたりを見まはした。

友は二三歩先に居たが、そのうち、こちらに向つて來た白牛が、歩きながら首をあげて、長く啼いた。それに答へる様な聲が湖の向からすると思ふと、後の藪からも又一聲、群の中からも一聲、湖畔はこの自由な網につながれて居ない獸の聲が四方から起つて、死んだ様な自然に向つて心のまゝを求め様な聲が、あちらからも、こちらからも反響を起すのであつた。

私は友のわきまで進んだ。二人は無言で前面を見つめたまゝ立つて居ると、その白牛は、啼きつゞけながら次第に近づいて來た。やがて三四間前に來ると立ち止まつて私達の方に、其無器用な長い顔を向けた。長く鋭い角は左右に殿めしく備はつて居て、肥わふとつた、つや／＼しい身體は、この野に養はれて、其自由を遮るものもない様に見える。その満身の思ひを籠めた様に、大きい目は、此處にある思ひかけぬ人の姿をいぶかしむ様に、じつとこの二人の人間にそゝがれた。後について來た牛は、白牛が止まると一所に止まつて同じ様にこ



ちらを見つめて居る。  
 私は、野獸の大きい體軀、その音等とは心の通じない表情を見ると、今自分達に何事が起るのだらうと思つた。わきの藪の中の音も近づく様に聞われるので、ふつと見ると、大きな黒牛の顔が柴の中から出て居る。それを見た拍子に一聲その黒牛が啼いた。

私はすぐんでしまつた。

遠い方では漸りに啼いて居る。又一疋色したのが啼きながら、白牛の後を駆けて來た。

私達の前に居る私達を見つめて居る白牛の瞳はその身體が動かぬ様に、私達にそゝがれたまゝ動きもせぬ。私達もその瞳を見つめたまゝ、この足一歩でも進めることも退くことも出来ないと思つた。

その瞳は、しかし、恐ろしい怒を表はして居るとは思へなかつた。たゞ何物

か、その心を驚かしたものを見つめる様に思へた。それにしても、私達、この様な獸に近づいて居たことの無いものは、その長い角や、狂はしい啼き聲に脅かされて靜かに考へることも出来なかつた。

不意に、友は一步進んだ。私は覺わす聲をたて様としたが、其時にその白牛は順れた牧夫に對する様に、柔順な風をして身體をまはして逃げ初めた。すると、其後から來たのもあはて、二三間駆け出したが、少し離れてまたこちらを見返して立ち止まつた。

私もふつと心づいた。同時に今までの凡ての思ひが心から去つて心安くなりこの柔順な牝牛の群を愛らしいと思つた。その瞳には、私達が彼等の愛する牧夫と見わたのであらう。この山の牛には、時折、親切な牧夫達が、放牧の群に鹽をやりに来る。その時に、この大きい形の、猛々しい姿をした群が、無邪氣な子供の様に集まつて來て、その牧夫にその鼻をすり付けながら、餘念もなく

そのもてなしを受けるといふ事だ。

そう思ふと、私は初めてその腫の表情を解し得る様に思つた。その大きな腫には猛悪な憤怒の思ひは少しも表はれて居なかつたではないか。其白牛は群の多くのものゝ中で、第一に慕つて来て、私達に近づき、其愛をこめた腫を見せたのではないか。粗野な、高い啼聲は、赤兒が先づ乳を求める時の心と幾何の差があらう。私は其時、この人を離れた山間で、つながれて居ない獸を見、この自分を脅かす様な大きい形、その啼聲に對して、見なれない心の疑と、恐れに對する本能の敵心とを起したことを深く恥かしく思つた。人間が自からを守る爲めに神の愛を以てせず、野蠻であつた祖先の胸に長く養はれて居た争闘の思ひが長しへに心にうつることを、無上の耻と思はれた。疑と、恐れと、私はこの獸の腫の中から、其愛の思ひをたやすく汲み取ることの出来なかつたのを深く恥ぢた。

それから友と相かへり見て色をなほしたが、私達の道が、また峠の上に来るまで、方々から啼聲の起るのを聞いた。それを聞いて群の方を見た時に、私達は其獸達に向つて、自分の拙さを感じて心に神を念じたのである。

## 鸚 鵡

晴れ渡つた秋のある日の事だつた。快活な人達が揃つて、江戸川に新しく架つた橋を見に行くといふので出かけた途中、本所の場末の或る狭い町を通つた。町は軒が低く薄暗い古びた家が續いて居る。壊れかかつた様な廂には苔が青々と生ねて居て、その上を照らして居る日の光がとりわけ憐み深く恵をかけて居る様に見えるのであつた。

其處を皆が憚り氣もなく話しながら通つて行くと、そのうちの一軒に鳥屋があつた。誠に見すばらしい、陰氣な家で、其家に飼はれて居る鳥は、春が來ても樂しそうに鳴きはしまいと思はれる程だ。廂の下に鳥籠が積み重ねてあつたが、その一番上に看版の様にして、青く塗つた鸚鵡の籠が一つ載せてあつた。

その中に雪の様な鸚鵡が入つて居る。

私は、それを見ると何となく立ち止まつて皆に

「鸚鵡が居るよ！」

と珍しそうに曰ふと

「珍しくもないじゃないか」

といつて、皆は見かへりもせず、行き過ぎてしまふ。私は獨り、その鸚鵡に氣が引かれて、尙ほ其處に立ち止まつて、その鳥を見て居た。

眞白な鳥はよく人に馴れて居て、私が見て居ると親しむ様に首をかたむけたが、聞き馴れない聲を出して、誰れか呼び立てる様に一聲ないた。すると奥から皺枯れた爺が出て來て、上りまちに立つたまゝ疑い深い目付きをして私を見つめた。

丁度この薄暗い處から出て來そうな、爺だつた。齒の脱けた、小さい皺だら

けの顔に如何にも心の荒んだ淋しい色が見ゆる。縞柄も分らぬ古い袷を着て、細い帯が食ひこむ様にしめられて居た。其身體つきはもう力が無くなつて、たゞ何となく此世を怨んで居る執念だけが、何處かに残つて宿つて居る様だつた。其特に零落した跡を籠めて居る、光のない疑いぶかい日は、人を暗い處へ引き込むものゝ様に思はれた。

その爺に見つめられると、私は其處に立つて居るのが、快くないので、急いで皆の跡を追つて其處を立ち去つた。だが、如何しても、この光景が明かに心に映つて来て、思ひ返さずには居られなかつた。

鳥も其持主も、何といふ零落であらうと思つた。

その町を通りぬけると、川の堤に出た。秋といつても、十月の初めだから、堤に添つて植わてある柳の葉も緑で、向ふ岸は陰が籠つて水が黒ずんで見ゆる。さつと河風が吹いて来て、冷たく顔にふれて行く、すると、もう晴々した野の

思いが心に湧く様になつて来た。

連の人達は、二丁許り先きを、橋を渡つて行くのが見ゆる。私は其後姿を見るとき、色々な考へを捨て、急ぎ出した。橋の上に来ると大河の流が東から西の方へ廣々と見ゆる。兩岸は丈の高い葦が遠く連なつて、何處となくうら枯れて見ゆるのが、風が吹く度びに波の様にうねつて居る。それに驚いて時々、中にもつて居る小鳥がバツと飛び出して、また其中に隠れてしまふ。河の水は廣くたゝねて、音もせず、丁度夏を押し流して行く様に流れて居る。日の光はあたりくまなく照らして、静寂の思ひが満ち満ちて居る様だ。

私は橋のたもとに立つて、暫くこの景色に見とれてしまつた。この何とも曰へない悲しい秋らしい葦のざわ／＼する音が胸にしみ入る様で、どうも獨でじつと自分の心に起つて来る思ひを深く思つて見たい様な氣がした。

ふつとまた今の鸚の事を思ひ出した。すると零落といふ事が切に思はれた。

誰でも鸚鵡の羽の色を見ると、高く聳れた樹の充分に枝がのびた、繁つた林と、熱帯の焼く様な光線とを想像しない人はあるまい。たとへ、私達の想像力が弱くとも、とりわけ美しい其夕映と、夕映が空に映つてまるで天地が一時にもわる様に成るのを想像することは出来る。それを思ふと其自然の力があくまで強く顯はれて居ながら却つて人の稀れな、物の響もしない森の静寂はどんなであらう。その静寂の中にこの雪の様な鳥や、又は華やかな色をした鳥が集つて来て、其奇異な聲で鳴き交はしたらば、どの様な思ひがされるだらうと、順々に思はれる。

その自由な森で生れた鳥が、捕へられて、海を越えて遠く日光も、森の姿も、もの、響も、思ひもかけぬ國に運ばれ来て、其零落した姿に、弄ばれ、埋れて行くのをあはれたと思つた。

だが、あの老翁も又如何したのだらうと思ふと更に不思議な意味が、其顔

の黠の一つ一つに籠められて居る様で、あのだまつて私を見つめた目つきは、測りがたい運命の黙示を話そうとして居るのではなからうかと思はれた。恐らく、その翁が言葉に表はしても、その思ひは人に傳へられまい。その聲が言葉を綴つて人に傳へるよりは、其聲の響は、はるかに人の胸に思ひ感せしめる力を持つて居はしまいか。

鳥が人に馴れて居るのは、人の奴隷にされて居るのだ。人が鳥を愛して居るのは、其零落の道づれにしたのだと私は思つた。

橋の欄にうつぶせに成つて、それからそれと感じた事を繰り返した。奴隷にされてあはれにも、其儘甘んじて居る鳥の鳴聲と、零落して心の暗く凋れた老翁の目とが、如何にも測りがたい運命を示して居る様に思へた。

其時、風がざわ／＼と音を立て、草をさわがせた。すると、鋭い鳥の聲が一聲、耳近く聞えて消えて行つた。水は静かに流れて行く。その上を何となく老

いた様な秋の日は、照らして、ざらざらと小波がかいやいて見わる。

私は四邊を見廻はして、淋しい思ひがした。又うつぶせに成つて水を見ようとすると、橋のむかふから、連の一人が待ちかねた様に呼んだ。夢が破れた様な心持がして、そこに行くつと、皆道側の茶店に腰を掛けて待つて居た。それに交ると、私はまた賑やかな快活な話にまきこまれてしまつた。

## 楚 音

私は三年ばかり前に、或る丘の森の中に住んで居た事がある。其森と云ふのは楓の大木が疎ら立ちに立つて居て、落葉時になると、其中の家が残らず露はれて見わる。家は丁度五軒あつた。入口の二軒は百姓家で、次の家は駄菓子を賣る小さい店、その次が私の居た家で、地主だ。主人夫婦はもう六十近い老人で子は一人もない。主人は終日ぶらぶらして居たが、女房が朝から晩まで、家の周囲で働いて居た。そこに私が下宿することになつたのである。

私の室は四疊半で中二階になつて居た。南向の日はあたりの良い、窓をあけると、森の大木の幹が、何とも云へぬ古びた色をしてその皺までが見わる。大きい枝がすつと庭の方にさしかゝつて居るのが、何時も何時も同じ様に目に入

いる。

春の事であつた。暖かい日か丘一體を照らすと、その森の大きい樹は一齊に芽をふいて、若葉の香がする。やさしい日の光は、其上をてらして、この森から、丘一體にかけて何もかも潤れて居るものは一つもない様になつた。

或る晩の事、私はランプの蔭で、あてもない考へをして居た。外は闇だ。じつと静まり返つて居て、暖かくなつかしくはあるが、何かい迫つて来る様である。このあてもない考へをして居る中、私は何となく、如何しても微笑をもらさずには居られなくなつて来た。火を見つめて居ると、獨で心が融けて、なつかしい思ひが浮んで来る様で、私は、何故か自分の側に誰れかが坐つて居て、私を後から見まもつて居てくれる様な心がする。

こんな感じがしながら、坐つて居ると、私は窓の下に歩みよる足音がする様に思へた。首をあげては耳をすまして、じつと聞くと、庭の方から忍び足に近

よつて来るものがある様に思へる。庭の木の間を縫つて、濕氣のある土をしとしとど、音をさせながら、歩いて来る様で、その音が胸にひしひしと迫つて来る。私は心一つに集めて、き、耳をたてた。

足音は窓の下に来て、はたと止つた。すると同時に人の氣はひがして、其呼吸が戸にかゝる様に思へた。私もそれにつれて呼吸をひそめて、その外の人を伺ふ様にした。そうすると、胸は大波をうつつて、血が頭に集つて来る様だ。何とも云へない心持になつて、外で第二の音をさせるのを待つて居ると、外の方でも身じろぎもせぬ様である。

私の心は益々一つに集められて、この戸を透して外が見ゆる様である。私は心に明かに外の景色を書き得る様に思へた。外の人、黒い影の様な人だ。その身體をひたと戸によせて私を伺つて居る。何か私の考へて居るものを、盗み見し様として居る様である。

その時、下で時計が十一時を打つた。それがまるで葬式の鐘の様に聞えた。私は急に火を付けて床の中に入った。すると外の人は立ち去つて行つた様である。

誰れが何しに來たのであらう？。私はいくら考へても、わからぬ。又思ひ出す人もない。そのまゝ考へ疲れてその夜は眠つた。

次の晩になると、又其足音がする。やはり同じ時間に、柔らかに濕つて居る土の上を踏んで來る忍び足の音がしづかに忍びよつて來て、戸の處ではたと止まる。

其次の晩も、次の晩も、その足音が來る。私はしまいには心が始終ものに襲はれて居る様に思へて、不安でたまらなくなつた。

それから幾晩かして、私は珍しく若い妹のある友達の處で、夜を更かして歸つて來た。その時はもう薄月がさして居て、道を歩いて居ると何處となく、水

の流れる響が聞える。何とも云へない楽しい思ひがする。私は、其の友達の子、幹さんと云ふ、その幹さんの、薄絹で花を包んだ様な頬の色をして、快活さうに話す姿を思ひ出しながら、久しぶりで、若々しい夢の様な思ひにまぎらされ、にこにこしながら、歩いて來ると、森の道に入つた。

百姓家の燈火が小さく、その臺所からさして來るわきを通ると、菓子屋の店に障子が閉めてあつた。それについて右に曲つて行くと、私の家が見える。私の室も見える。そこまで來ると私は立ち止まつた。私は、窓の下に例の人が立つて居はしまいかと思へて、そつとすかして見た。其處には何も見ぬ。黒い影もない。しかし私は何故か、毎晩する足音の主はこうするのであらうと思つて、庭の木戸を開けて、足音を盗んでその窓の下に忍びよつた。私の室にすでに人が住んで居て、その人が胸の奥に畫がいて居る美しい畫を、盗み見したい様に思へたからである。



窓の下に立つて、ひたと戸に身體をよせてそつと伺ふと、私は心臓のひびきが盛になつて、呼吸がはづむ。その呼吸を殺して、戸をすかして中を見ると、不思議ではないか、その時、私は、室の中に燈火がついて居ることに気が付いた。はつと思ふと益々胸がをさるのであつたが、私の室の中に、私の机の前に、たしかに誰れもしれぬ人が坐つて居るのであつた。

## 犬

白熱の夏の光が、きらきらと目もまばゆひ様に照らして、廣い街頭には、人通りもない。まるで、夜が更けた様に、白日の寂寞が、その心を漲らして居る。緑葉の陰はせまくはつきりと、地に印されて、風が吹けば、さやさやと音をさせる。

私は、この目の暈る様な暑さに苦しみながら、白日の威に屈服して居る町を通つた。

自分の足音、砂利を踏む足音が如何にも疲れて居る様に聞えて、それにつれて、心まで疲れる様だ。幾度か吐息をつき、吐息をつきながら汗をふいた。さつと風が吹いて来て、小さく塵をあげて行く。私は緩い坂にさしかゝつ

て來ると、一疋の犬が來た。

舌を出して、疲れたらしい息づかひをして、わき目もふらずに、坂を上つて行く。全く力全體を籠めて、歩く爲めに苦しんで居る様に見えた。

憐む可き犬よと、私は思つた。

よく見ると、この憐む可き犬は、羽根の無い鳥の様に、更に妙な形をして居る。白い毛は汚れてひつたりと身體につき、其尾は短く切られ、其上に耳が頭にひつついて、全體にまるで裸の様に、ひだの無い身體をして居る。それは、其目の餓えて居る様な光！。少しも柔かみのない顔！

まるでこれは、足も手も断たれて、たゞ目が怨恨を含んで、世の中を敵としてにらんで居る様に見えた。

私は、其淋しく餘裕の無い、たゞあわぎあわぎ行く犬の姿を見て、振り返りながら、それが、坂を上つて右の方に曲つて見わなくなるまで、其せつせと歩

いて行くのを見送つた。

それが見わなくなると、また夏の光が輝いて居る道は、何物もない寂莫にかへつた。

## 月　光

旅から歸つて久しぶりで、お小夜の家に遊びに行つた。

東京に歸つて来て見ると、何を見ても、もう秋らしく成つてしまつて、其處らが、しつとりと込み入る様な思ひを漲らして居る。何處となく、淋し味を帯びて、町の屋根や、ガラス窓に反射して居る日光を浴びると、つくづく長旅をして来た事であると思はれるのであつた。

もう九月も未だ。——私が東京を出立したのは四月の初めであつたから、かれこれ六ヶ月になる。その間に私は九州の方から、朝鮮の奥まで歩いて来て、色々の風俗や、珍しい言葉や、思ふ存分好奇心を満足させる事が出来たが、そ

のかはり、久しくお小夜の顔を見なかつた。

そこで、着くと直ぐ、荷物の中からお土産の品々を出して、小石川のお小夜の家に出かけて行つた。

私はお小夜とは、古い友達なのだ。こう言ふと可笑しいが、實は私の亡なつた親友の妹さ。まあ私にも妹の様なものだ。年は八つも下。

門を入つて、玄關の呼鈴を押すと、いつもの取りつきでなく、白い西洋前掛をかけたお小夜ちゃんか、ひよいと顔を出した。そして私が立つて居るのを見ると、驚くまい事か、まあ！と言つたきり、暫くぼんやりした様になつて、黙つて居る。やがて、喉の奥からやつと出たといふ様な聲をして、

「まあ、いつお歸りになつたの？」

と、この「まあ」を、如何にも感にたへぬと言ふ調子で言つた。

それで、私何が言をうとすると、お小夜は漸く吾に歸つたと見えて、には

かに上がれ上がれと急ぎたて、私を引き上げた。上がったのは、平常の二階のお小夜の部屋である。

涼しそうな、欄干の方に布團を敷いて、私に座れと言つた。お小夜は、それに向ひ合つて、自分の机の方に座つた。外から入る風を受けて座につくと、お小夜にはかに改まつて、娘らしく、丁寧に挨拶をする。私はこれが、ふき出し度く成る程おかしかつた。

「すい分永く行つてらしたツね」

こう言つたが、その様子が、暫く見なかつた間に、一かど大人びて、何處どなくはつきりして來た。それに年ごろの娘がよくする、わざと人を近づけないと言ふ態まで見せて居た。

私も、まだ旅心がぬけないので、何處かそはついて居る様で氣が落付かないので、暫く顔を見合つたまゝ、黙り込んでしまつた。

家内も何となくひっそりして居る。第一、この叔母さんが見えないので、私は、

「叔母さんは？」

とさくと、お小夜は、ひよつと眼を移して、私を見ながら

「居ませんの、姉さんの處に行きましたワ、もう一週間にもなるのよ」

「あ、福島に、そうですか」

「さつと姉さんが止めて歸さないのよ」

「じゃ、お小夜ちゃんは何番ね」

「わゝ、そうよ」

こんな事を言つて居るうち、お小夜は一寸一寸、人なつっこい眼付をして、私を見て居たが、一分一分と、その外々しい風を消して行く様で、よく子供の様に悪るふざけをして、喜んで居た以前の心持に歸つて行くのらしい。私はたゞ、

何時の間にもこの女らしい、用心深い心が、この子に芽ざしたらうと思つて、先刻から考へて見た。

こうやつて、暫く話がとぎれて居たが、やがて、つくづく感じた調子で

「私、獨りで淋しかつたは、獨りぼちですもの、ね留守番っていやなものね、でも、もう運造さんが歸つていらしたから、もういゝワ」

と、愈々本音に歸つて來た。さてこうなると、その心が變幻出沒極りなく成る。それはいつものだ。今沈んで居るかと思ふと、もう浮き立つて來る。笑つて見たり、怒つて見たり。わるくすると泣き出される。まるで、私の周圍を勝手に廻り廻つて居る様な工合さ。(實はこれがお小夜が私に見せる姿なので、私が又お小夜の可愛くつてたまらないわけであつたのだ。)

愚痴っぽい聲をして言つて見たのだが、私に取り合はないで居ると、一寸しよげた。すると此度は、にはかに晴々した調子で、

「運造さん、お話、ようお話をして頂戴」

「何のさ、旅の？」

「わゝ、九州のでも、朝鮮のでもいゝは、九州つてどんな處？」

「九州つてどんな處！(私は口眞似をして笑はずには居られなかつた。)そんな聞き様があるものか」

「じやどう言へばいゝの、そんな事はどうでもいゝから、早くお話をね、」

愈々本性をあらはして來た。私はそれで、途中の話を初めた。その間お小夜はじつとして聞いて居た。その可愛い、瞳を大きくして、私の顔を見つめて居る。夢中になつて居るので、唇のあたりが靜かに眠つて居る人の様に、軽く自然のまゝになつて居て、頬から顎にかけて美しい色をして、……………私の嬉れしいのはこの顔なのだ。畫家にも見せたら、いや、私が畫家ででもあつたら、大さはぎをやつて、素敵な畫題をつける處であらう。

その中に、晝の光が次第に移つてしまつた。下で六時がうつた。すると、にわかにかが付いたと言つた風で、急にませた顔をして、立ち上りながら「待つて居らつしやい、私御馳走ささへて来るワ」と言つて、降りて行つた。

## 二

私は少しにぢり寄つて、じつと欄干に凭り掛りながら、そこらを眺めた。ここは、小石川台町の高臺だから、前に矢來の一體が見え、右手の方にはるかに早稲田の森が見える。見るとこの眺め一體に秋の色を帯びて、群々として居る。青葉にも何處か赤みがかつた色が見えて、四邊が何となく聲をのんで、うなだれて居る様だ。夕日は今丁度早稲田の方に傾むいて、空に燃ゆる様な夕映の色を流して居る。

こうして獨りでそこらを眺めて居ると、心もひとつそりして、静かになる。……暫く止んで居た風が又吹き出した。すると露を含んだ、冷たさが肌に感じられて、袂などもしつとりする様だ。……ふつと遠くで何か音がした。その響が、しんとした廣い寺の堂で反響する様に、そこらに傳はつて行く。あたりが悲しみを含んで居る様だ。こう思つて居ると、風にあほられて、青桐の葉がはたはたと幹を打つ音が、すぐ耳の傍で聞けた。

すい分長い旅をしたのだな、——と繰返して思つた。こうしてじつと坐つて居ると、歴々と、歩いて來た山川が目に見えて來る様に思へる。何處かで、急流の響が聞へる様だ。其の山の姿、森の景色などが、目前に迫つて居る様で、私は今日も山越えをして、知らない山間の旅宿の窓にでも凭つて居る様な心がするのである。

はたはたと又桐の葉の音が聞けた。ふつと吾に歸ると四邊の物の響が一時に

耳に入る。

私は立ち上がった。何となく淋しくはかなく物足らぬ思ひが、頻りに心を襲つて来るので、欄干の處を離れて坐敷に入った。

室の中はもう、薄ぐらくなつて居る。赤い模様の机掛の色が、黒ずんで見えて、そこらのものに、薄暮のかすかな光が力なく宿つて居る。——もの淋しい秋らしい光である。見あげると、机の正面に懸てある、ルブロン夫人の「慈愛」の寫真板の額が、ぼんやりと見えて、額縁の金が、少し鏽を帯びて居て、黒ずんだ光を放つて居る。重くるしい、陰鬱な氣が漲ぎつて居て、人に迫つて来る様だ。私はそこに立つたまま、四邊を見廻した。

其時、下で賑やかな笑ひ聲がして、お小夜がラムプを持つて上つて來た。パツと光がさして、室が明るくなると、急にそこらのものが、軽くなつて、「慈愛」の額も、不相變、可愛睡つきをして居る。

私が突立つて居るのを見ると、お小夜は

「どうしたの？」

と、入口に立つて見ながら言つたが、物を見つめて居る様な顔をして、私がじつと動かないのを見ると、急にラムプを机の上に載せたまま、そこに俯になつて笑ひくづれた。

暫く笑つてから、

「まあ、どうしたのよ、蓮造さん」

とやつと言つたが、その蓮造さんは又笑ひの中に消されてしまった。

やがて、千代が膳を持つて來たので、漸く笑ひ止めて、私と向ひ合ながら、ちやんと坐つた。

「今晚は、私も一所に戴くの」

と甘へる様に言つて、私を見たが、まだ私の顔が平常に復して居ないと見えて、

いぶかしそうに、

「ほんまに、どうかして？」

と、小聲で言ふ。私は

「もうもしやしなう。」

と言つたが、自分でもわからない感じがした。

三

やがて臆が下げられた。

月の光が、ちらちらと欄干に映つて居る。私は又身をいざらして、欄干の處に出ると、目の前の景色は悉く黒く、月下に一種の沈黙を守つて居る。——遠い早稲田の森には、薄く霧がかゝつて、森の杉が其上に浮び出て居る様だ。

お小夜の方に脊を向けて、それを眺めて居ると、何物か私の心に欠間が生じ

たのらしく、それに乗じて、私を引きつって行くものがある様に思はれる。

私は大切なものを失つて、それを見付け出さうとして居るのではないだらうか、こんな心がふと浮んで来た。

こんな事を考へて居る時、お小夜は後から、

「蓮造さん、どうしたのよ」

と、泣き出しそうな聲をして言ふから、後を向くと、一心に私をにらんで居る。

「どうもしない、一寸考へて居たばかりさ」

「何を考へて居たの」

「つまらない事さ——それよか、こゝに来てとらんなさい月がいゝから、」

と、欄干の處に座らせ様とすると、甘へてすねた様な風をしながら、私と同じ様に、欄干に腕を掛けて、こちら向きに座つた。

月の光は其顔の半面を照らして、欄干になげかけて居る腕を玉の様に見せて



居る。私はそれを見守つて居たが、外の氣が泌み入る様なのに引かされて。こんな事を話かけた。

「静だね。お小夜ちゃん、朝鮮でも、こんな静かな晩が一晩あつてね、その時には僕、お小夜ちゃんの事やなにか、色々の事が思へたよ」

「そう、私ね、こんな晩に獨りで居ると、よく泣き度くなる事があるの、……誰も私を可愛がつてくれる人が無い様で、獨りつぎりの様で、……悲しくなるのよ、」

「そんな時には、直き兄さんの事を思ひ出すだらう」

「わ、兄さんの事も思ふし、外の事も思ふワ」

こんな話をしながら、お小夜の横顔——月がてらして居る頬の邊を見て居ると、すると、心の中で、「オヤッ」と言ひ度くなる様な心持がして、今迄と打つて變つた心持が湧いて來るのを覺えた。

何かかすかに覺えて居る記憶を呼び起して、故人の顔でも、書き出さうと考へて居る様な心持である。——そして今日の前にある顔が、私にそれを思ひ出せ、思ひ出せと急きかける様だ。

何だらう？ 自分でもわからなくなつた。

私は又黙り込んで、お小夜の顔を見て居た。すると、お小夜が急にこちらを向いた。

「あら！ 何故そんなに私を見て居るの？」

と言つたが、私はそれと同時に、胸がどきつとした。分つた、そうだ、それだ、と獨りでうなづいた。これでやつと、心が落ち付いた様な心持がした。

それは、可笑な話だが、豊後に旅をして居る中、日出と言ふ處で逢つた女の顔だ。それをまだ忘れられなかつたのだ。

其人と言ふのは、大分から日出に行く道、田舎のガタ馬車の中で、乗り合は

した人なので、名も知らなければ、言葉も交はさなかつた人だ。それに、如何したもののかその人の事が忘れられなくつて、幾度か旅をしながらも思ひ出した事がある。しかも、其様なとりとめもない、所爲を自分で罵りもせず、何となく、何時か又其人に遭ふ機会が有る事と、これもそつと言つて居た。何故かは知らぬ。しかし全くそうであつた。

その面影がこのお小夜に見え様とは……私は驚いて、一心に其顔を見て居ると、

「ま、ほんとに迷造さん、……」

と言ふ、私は何とも言葉が出ないので、やはり見つめて居ると、

「いやよ、をかしいワ、そんなに見て」

聲高に言つたので、私は心づいて

「何でもないので」

と軽く言はうとしたが、喉がひからひた様で、聲がかすれて出なかつた。

思ひも掛けない事だ。もう幾年か兄妹の様にして居たこのお小夜が、私の胸を騒がす種にならうとは、實に思ひも掛けなかつた事だ。——そして私は如何し様と言ふのだらう、と自分で思つて見たが、考へがましまらない。その上、何となく真らしく思へない處がある。夢の様なのだ。しかし私は

「その淋しい時に、僕の事を思ふかい」

と言つて、お小夜の顔を伺つた、すると、

「思ふワ、だつて、私迷造さんが一番好ですもの」

と、臆面もなく言つてしまつて、その晴やかな瞳には、少しも恥を含んで居ない。何かある可きものを、あると信じて、少しも疑はない様に、お小夜はわかまりのない心を明かに示して居るのだ。

これが、お小夜の平常であらう。しかし私はそれを見ると、言ひ様のない

苦痛と、不満を感じられた。何故か私の心がひつたりとお小夜の心に合はない様で、二人とも遠く千里も離れ合つて居る様で、心がいらくする。何故私のこの思ひをお小夜は感じないかと、人が怨めしくも思へるのであつた。

不思議な事だ！私の魂が夢を見たのであらうか！

## 窓

今日は特に静かな夕方である。私の立つて居る足下から、この廣場一體に、クロワールの三葉が活々とした、色をして、ぎつしりと生ひしげつて居る。

私は毎夕、この廣場まで運動に来るので、このクロワールの中を、往つたり來つたりしては、夕方の濕り氣のある空気を吸つて、深い息をして、それで何も言へない良い心持になるのを樂しみにして居るのである。それとも一つは、この向ひの丘に立つて居る、家の窓を見る事なので、これを見て樂しい思ひをするのは私達同窓の人々の特權であらう。

この廣場と言ふのは、町端の、丘の下の千坪許もある空地である。晝間は近所の子供達の遊び場になつて居るので、都住居の狭苦しい中に育つた子達が自

由にはねまはる、楽しい場所なのだ。それが、夕方になつて、その四邊憚らない聲をして、遊んで居た子達が、家に歸つてしまふと、跡はひっそりして、そこらに踏まれたり、寝ころばれたりして、しなへて居る草の葉が、起きなほつて息を吹き返へす。風がその葉を、そよかして、そろそろと吹いて通ると、もう静かな休眠の時が来て、やさしい夜がその上に降りるのだ。

丁度その頃を見あてに、私は家を出かけるので、晩餐の箸を置くと、ぶらぶら、生垣の町を通つて、四五町もある處を、廿分もかゝる様に歩いて来る。——今日もそうなのだ。

空はと云ふと、日が落ちるにつれて、裾の方が薄紫になつて、晴れきつて居る。そしてその薄紫と言ふのが、廣く一體に濕り氣を含んだ、光を帯びて居るので、如何にも静かな落日の思ひがされる。その中に、何時も星が一つ、晴れきつて居る空ではあるが、落日の光が漲ぎつて居て、何となく薄絹の中から、

もれて見ゆる様に、その星が光つて居る。初めは一つで、西の方に見わた。大きく深い胞から溢れる様な、光を放つて居たが、やがて、遠く離れて、北の方にも一つ見わた。

この静かな空を見ながら、そのクローワーの中を、往つたり來たりして居ると、何を思ふともなしに、たゞ心に深くなつたのむものがあつて、平安なこの景色に包まれて、この景情が吾身に満ちて來る様である。

丘は落葉林だ。この頃は、丁度四月の初めだが、丘の上の、栗や、櫟や、楓などは、まだ芽を出して居ない。落葉した梢が、薄紫の空に、黒くはつきりと影を寫してでも居る様、細い枝の先まで、すかして見わた。それをこゝに立つて見て居ると、この丘の昔野であつた時の姿が思ひ浮べられる。この様な樹立の丘は、この武藏野では、到る處にあるのだ。

その丘の北端に、大きく聳れた寺がある。その寺の右にあたつて、一軒の

西洋建の家が見える。これが、私にとつては、人しれぬ寶で、實に快い追懐の種となつて居る家である。

この丘のこんもりした森の工合もいゝ、その森の間からちらちら、丘の上の家が透いて見えるのもいゝ、寺の聳れた屋根もいゝ、夕空もいゝ、この野にあるクローバーもいゝ、だが、この丘の端の家は、何よりも懐しいのだ。たい追懐の種ばかりではなく、それに對して見ると、何となく力づけられる様である。

家の風は、二階建てで、質素な、木造の西洋造りだ。窓が六つ、三つづゝ、二段に並んで居る。その中程に、大きい楕圓の古木が立つて居る。

草の中を歩きながら、空を見たり、森を見たりして居ると、いつでも、その窓ガラスが、夕日を反射して居る處が見える。すると、私は立ち止まつて、その窓を見入つてしまふのだ。

一體その家と言ふのは、麻布の老先生の家で、私達同窓の一團が永らく寢食

した處である。

こうやつて、立つて其窓を見て居ると、私は必ず、彷彿として先生の顔を思ひ出す。先生の顔はと言ふと、先づ長い眉の下に窪んで居る眼を思ひ出す。俊嚴ではあるが、春の海の様子に、愛を湛へて、私達に對はれたその眼だ。次には、白い鬚と、秀でた鼻と、……剛健な思ひの溢れて居る顔。そして、温和な嫌抑な物の言ひ振り、こうして、先生を思ひ浮べる事が出来る。もう實に親しみ盡し、尊み盡した顔だ。私達同窓は、何時でも胸に刻み込んで、決して失はない顔なのだ。

私は、始終、この先生の顔が身に付き添つて居て、嘗て其處で親しく、接して居た時の様に、先生が私に臨んで居られる様に思へる。

今も、其窓を見て居ると、先生の顔が浮んで來た。今日は特別なつかしく見える。そのこけた頬も、例の眼も、非常にやさしく思へるのであつた。少し、

其眼尻に皺をよせて、まるで孫が何かを見て居られる様な風だ。これはいつも先生が、其塾の書生が勝れた事をした時に見せられる顔なので、その時は、其人は、大得意なのだ。私はそう思うと、身體もしやんとなる。何かしらぬが勇氣も出て来た様で、じつと自分の思ひに心を集めた。

すると其時、空を低く、鳥が泣いて通る。ふつと気が付いて、見上げると、空の色がまるで變つて居た。華やかな夕日の色が消ね去つて薄暗く、闇の色が包んで居る。

私は、歩き出した。歩きながら、昔の事を思つた。先生の家に住た時の事を。先生が熱のこもつた調子で、出埃及記のモーセの話が話されて居た時の事を考へ出した。

その時の同窓は今では散々になつて居る。其時、各々の胸に先生の顔を寫して別々に先生を信じて居た人達を一人一人思つて見た。

どうして居るだらう、皆は？、と思つて見た。

もう足下も暗くなつた。クロゾーの葉は、内側を合せて、閉ぢてしまつた。全くの眠りの時が来た様だ。

歸らうと思つて、も一度、先生の家を見ると、何時の間にか、その窓から燈火がさして居る。それが如何にも懐しく親しい思いが籠められて居る様で、私は、どうしても先生にお目に掛りたくなつた。それで、歸り道を轉じて、その丘の方に行つた。

其晩、久しぶりで先生にお目に掛つた。

## 暗 夜

夜は思ひもかけぬ心を人に起させるものだ！

太陽の光が隠れてしまふと、人の胸は躍り出す。それは丁度そこらに、薄暗くなる時、一齊に虫が鳴き出す様に、陰日向なく照らして居る、日光の明白な世界をまぶしがつて居た人の心は、にはかに自分の力をほしひまゝにし得る様になつて、勝手な事を仕度くなるのだらう。全く、夜は思ひも掛けぬ心を誘ひ出すものだ。

と、こんな事を思つたのは、或る晩の出来事からである。或る晩の事、私は本郷の友達の家遊びに行つて、更けて歸らうとして、四丁目の角で、電車を待つて居た。

其頃はもう、何處か春めいて居た。風が暖か味を含ませて、なまめかしく吹いて來るので、まだ冬着を着ては居るものゝ、身體がのびくする。夜が更けて居るので、四邊がしんとして居る中にも、非常な力が籠つて居て、下から押し上げて來る様である。

電車が暫く跡切れたので、街の角に立つて待つて居ると、廣い街頭は、人通りが絶へて、瓦斯の光線が、何か淋しそうに、照らして居る。其處に立つて待つて居る人は、私を加へて三人居た。暫くすると、赤門の方から又一人商人體の男が來て加はつた。

電車がなかく來ない。あくびをしたり、下駄を鳴らしたりして皆が待ら兼ねて居る。其處へ、角にある下駄屋の傍の路地から、ひよっくり人が出て來た。甘恰好の娘だ。例の束髪で、新銘撰の衣服に、瓦斯ものゝかすりの羽織を着て、白い毛糸のシオールを首の處へ巻き付けて居る。左の手に大きい風呂敷包を抱

へて、暗い道から、青白い瓦斯の光の下に、ぬけ出した様に顯はれて来た。通街に出ると、こゝに待ち合はして居る、四人の顔を、一寸と見たが、うつむき加減になつて、立ち止まつた。其時又、其女の出た来た路地から、頭を綺麗に分けて、白い西洋前掛を掛けた、青白い顔の若い男が、光の下に半身を顯はした。それを見ると、女は急いで路地の方に引き返した。男はそれと同時にまた、暗い中に隠れてしまつた。

女は暗い方を向いて、立ちながら何か頻りに、うなづいて居る。やがて、軽く挨拶をすると、其處を離れて、此度は、私の立つて居る前を歩いて右手の方の電柱の前に佇んだ。

其女は、青白い弾力のない顔色をして居る。前髪の少しほぐれ懸つて居る額が、少女らしくなく憐れに見えた。顔が一體に瘦せて居る様で、やさし味の無い口付と、小さい鼻が見すばらしく、卑しい面だちをして居る。ここに待つ

て居る人達は、皆いぶかしそうな目付をして、無遠慮にその女の面を見返つて居た。

そうする處に、三田行の電車が来た。しんとして居る町の中に、そこらをゆるする様な大をい響きさせて、角を曲ると、其處に居た人達は、一齊に乗口に集まつた。

その女も私も、それに乗り込んだ。電車は夜更けの割り合ひに込んで居たので、私達は大方立つて居た。その女は、片手に布呂敷包を持ちながら、片手で、皮につかまつて、私のすぐ前に立つて居た。

電車は動き初めた。明るい電燈の光で、一層よく其顔を見る事が出来た。荒れはてゝ居る顔だ。年よりも餘程、ふけて見ゆる様だ。其顔には情慾に荒んだ一種の冷やかさを見せて居ながら、艶めいた風をしては、強いて若く見せ様とする様な色が顯はれて居る。其を見て居ると、何處となく悪臭を嗅ぐ様な心持



がされた。その上、其にごつた、悪すれのした、眼付は！。

夜更なので、車がやけに走る。しんとした大通を、勢こんで走り出すのは心持のいゝものだが、其動搖の激げしいのには、幾度かよろめかされた。すると、其度に、其女は、なよなよとして、強て人の身體に觸らうとする様に、前の人や、後の人によろけかゝる。そして、よろけかゝる度に、その眼で人を盗み視する様な風をして、媚た、笑ひを見せて居た。

丁度、神田明神の坂を下りようとして、電車が一層激しく揺れた。すると、その女はよろよろと、前の男に寄り掛つたが、それと同時にうつむいて、笑ひかけながら、下から人を見上げる様にして、

「すみません！」

と、わざとらしい小さい聲で言つた、

その顔、其には人の情慾を誘をゝとする、恐ろしい力を示して居る様であ

つた。其男は(中年の商人體の男であつた)知らぬ顔をして、傍を向いてしまつた。

電車が須田町に着くと、乗つて居た人が、半分位になつたので、その女はその空席に腰を掛けた。すると、私の後に居た廿七八の男が、直ぐその傍に坐つた。私は、その向側があいたので、そこに坐つた。

すると、其女は、急に身體を横向にして、其男の方を向いた。そして羽織の前をかきあはせて、膝に手を置きながら、うつむき加減にして居る。その男は——小學校の教員とも思はれる様な風で、野暮な仕立ての背廣に、インパネを着て居る。才子らしい目付をした、色の淺黒い、鼻のいかつた男だ。聲を出したら、必ずとほつて、早口だらうと思はれる。——その男は、そつとその女の、こんな風にして居るのを見て居た。

何だらう、この女はと私は思ひ出した。女は車の揺れる度に、一寸一寸と顔

を上げる。顔を上げて男を見るのだ。そしては唇に微かな笑を含ませて、うつむいてしまふ。すると、男は次第にその方に身體を向けて、尙ほ熱心にその女を見つめ出した。それを見ると女は、わざと外を見る様にして、顔を上げたが丁度その時、車が急にがたりと止まつて、直ぐ動きだしたので、皆前後にのめる様になつた。女は一たまりもなく、と言つた風に男の膝に倒れかゝつた。すると男の眼にやさしい色が表はれて、きつとしてみても居た唇に笑が含まれた。私は、そうかと思つた。

やがて、電車が愛宕下に着いた。女が身を起して立つた。それに連れて男も立つた。この先の見たさの好奇心にかられて、私も立ちあがつた。電車を降りると、もう十一時すぎなので、兩側の町は戸を閉めてしまつて居る。其薄暗い中を、男は大またにゆつくりと愛宕下の方に歩いて行く。女は、小走りに下駄の音をさせながら、男の後について、離れず、近よらずと言つた様な風に歩く。

いて居る。二三町行くと、男の右に並んで歩き出した。と思ふと、その後を廻つて左の方に添つて行く。やがて町が暗い處になつた。すると、女が急に身をよせて、男の腕にすがりついた。男は立ち止まつた。立ち止まつて振り返つた。女は何か言つたらしい。

それを見ると、私は急に引返した。自分ながら、あまりに好奇心に驅られ過ぎた様な思ひがして、甚だやましく感じられた。それから、返り道に自分で頻りと、自分を辯護して見た。

\*\*\*\*\*

次の朝は、殊更によく晴れて、日の光までが春らしく、愉快そうに照らして居る。空は澄みきつて、一點の雲もない。私は其日光を浴びて、町の中を歩いて居ると、昨晚の人達の事を思ひ出した。この明々白々たる、日光の下に照ら

されて、やはり昨晩の人達は呼吸をして居るのかと思ふと、不思議な感がした。しかし、今、あの人達は何を思つて居るだらう。あの二人の顔は、今互にどの様な心を表はして居るだらう。

日光は少しも隠す處なく、凡てのものゝ上を照らして居る。其光の下に立つて、昨晩の事を思ふと、人間の心が甚しく不思議なものであることを感ずる。全く夜は人の心を恣にならせるものだ。

## 櫟 林

私がまだ學校に居る時分の事だったが、兜蟲を採集し様と思つて、目黒から澁谷あたりの、雑木林の中を歩いた事がある。

九月に入つたばかりであつたが、そこらには、もう萩も咲いて居たし、夏草の中に交つて、桔梗の花なども、ちらちら面影を見せて居た。其にもかゝはらず、空には猛烈な日光が照らして、青葉の色が輝やいて見ゆる。——まだなかく秋らしい思ひはされなかつた。

こんな時に、野あるきをして、森の中に入り、木の陰のさして居る下に立つと、急に涼しい、しめり氣のある風が吹いて来るもので、疲れて居る心持もはつきりして、喉が渴いて来る。清い水が一杯、心底から愜しくなる。この様な

楽しい心持はあるまい。身體の慾と言つてもこの様に自然な、心持は少ないから。

それに武藏野と言つても、目黒から澁谷の方に掛けては、丘が多い。少し高い處に昇つて見ると、こんもりした森が其丘を包んで、遠く起伏して居る風がよく見える。その中を歩いて居ると、森、森を出ると丘、丘を下りると、畑、並木道と、色々に變化がある。その丘の下の並木道と言ふのが、その中でもなかくなつかしいものだ。

その日も、私は氣が倦んで居たので、一日がけの散歩をする氣で、よく櫟林の根の處に、群をして居る兜蟲を、見つけ出してやらうと思つて、そこらの林の中にもぐり込んだ。

何でも、目黒と澁谷との間位の處であつた。櫟と櫻との並木道があつて、右手には、道に添つて、二三軒の百姓屋がある。左の方は畦になつて居て、小川

が流れて居た。その流れに添つて、細長い田があつた。其並木道を（櫻の葉はもう少し黄ばみかゝつて居たが。櫟はまだ青々として居た。）歩いて行くと右に出つて、傍に入る小道があつた。少し坂に成つて居たが、それを上ると、又林があり、さうなので、上つて見た。するとトマト畑に出た。トマトの果實が、重り合ふ様にして熟して居る。其上に日光が反射して、艶々しい、果の色が如何にも心持よさそうに見える。それで、路傍の一つ手で觸はつて見ると、暑い日に蒸されて、薄い皮がはりきれそうに、熟して居る。こう言ふ物を見ると自然に對して神聖な喜びを感じるものだ。何となく、自然の勞働の結果を見て同感する様な感じが起る。

私は暫くそれを眺めて居ると、空に少し風が出たと見えて、雲足が早く成つて來た。眞白なちぎれ雲が、吹き飛ばれて行く様に、通り過ぎると、やがて、灰色をした夕立雲らしいのが群々と顯はれて來て、日の光がすつと影になる。

こうやつて、思ひ掛けぬ雨に出逢ふ事は、度々あるのだ。

私は暫く其處を眺めて居たが、やがて、其畑を通り越して、やゝ広い樸林に入り込んだ。林の中を歩いて行くと、細徑の兩側には、柔かい芝草が繁げつて居て、をときり草や、女郎花が黄い花を着けて居る。其他にも、小さい野草が一輪、二輪、と可愛らしく花を咲かして居るが、それを見ると、誰でも必ず、懐かしいと言つた様な、静かな心持が湧いて来るであらう。

私は次第に奥の方に入つて行つたが、大分疲れたので、胡頹子のひよろりとした枝が、さしかゝつて居る陰に腰をおろした。

こんな事をして居ると、何となくだらく、眠氣がさして来るものだ。これから何處に行つて見ようかなと、半分は動くのが大儀な心持がして居る時に、脊の方で人の話聲がした。オヤと思つて、そちらを向くと、若い男と女とが歩いて来た。

私の居るのには、氣が付かないと見えて、二人とも何か一心になつて居る様だ。其二人の顔には、一寸見ても、直ぐ心に混雜した事が起つて居るのがわかる程、急ぎ込んだ色が顯はれて居る。

男はと言ふと、色の白い、面長な、若々しい瞳付して居る。年は廿四五でもあらうか、白飛白の、ゆかたを着て、麥藁の帽子を右の手に持つて居た。唇をかたく結んで、何處か怒の色を含みながら、どうかして、静かに心を落ち付け様として居る様に見える。女は甘恰好の。學生だ。神経質らしい少しにごつた瞳付が、何か烈しく情に動かされてでも居る様な、もねる様な思ひを見せて、時々、そつと男の顔を見る。

美しい女ではないが、人を引きつける様な力のある顔だ。そして、その髪には白い槿の花を、無雜作らしくさして居るのが、なかなかよく見える。

二人は無言のまゝ歩いて来たが、私の居る處から、三間ばかりの草の上に腰

をおろした。暫くは兩方とも黙つて居たが、鋭い聲で男が、

「田上君だつて、失敬ですよ。僕にあんな事を言へた義理か、……しかし、僕は昨晚其の話を聞いた時は實際驚いた。そして、あなたはそれは本気でやつたのですか。」

「本氣つて別に、私、どうも……」

「で、お家の母さんは其結婚といふ事を承諾なさつのですか」

「いいわ、」

「あなたは勿論承諾なさつたんでしよう」

「したと言ふ事はありませんワ、たゞ田上さんがそう言ふ事を、をつしやつた事がありました。私が黙つて居ましたから、そうとお思ひになつたのでしよう」

「わからないな、僕には眞實の事を言つてもいゝじやありませんか」

「あら私、偽なんぞ……」

と、暫く話がとぎれた。此時、風が林の梢を鳴らしてすぎた。枝がゆれるに連れて、チラチラと日の光がもれて、そこらの草の葉をかがやかす。何と言ふ静かな事だらう。しかし、こんな静かな處に来ると、人の心は何もかも皆一所に思ふ處を顯はすと見わる。

此度は女から言ひかけた。

「で、私どうすればいいでしょう、もう何でも、仰しやる通りにいたしますから」

「それは、今も言ふ通り一層、家にお歸りなさい」

「家に？」

「いけませんか、それが一番いいと思ひますよ」

女は黙つて答へなかつた。暫くして、

「私、ほんとに、仙臺で田上さんにお目に懸らなかつたからこんな事もありま

すまいし。又、大森で、あなたとお話しなければ、こんな苦しい思ひはしなかつたでしょうにね」

と、獨語の様に言つた。  
すると男が、

「いや實は、昨晩までは、僕はあなた達がそんな仲だらうとは思つて居なかつたのです。田上君は、あなたを、従妹だ、従妹だと言つて居るしね、あなたも兄さんと言つて居てたしやう」  
こう言つたが

「では、愈々、歸りますね」  
と念を押した。

「ね、あなたがそれがいゝををつしやるなら歸ります」  
と、弱々しそうな聲をして、男にすがる様に言ふ。

「それがいゝでしよう、そうすれば、跡は僕がよくしますから」

「よくつて、どんな風になさるの？」

女は心配そうに、聲をはづました。すると此には、男も覺束なさそうに

「どうつて、兎に角、田上君にもよく誤解の解ける様にしましょう……………」

と言ふのを、女がさへぎつて、

「だめですよ、田上さんは、あんなに、私達の事を疑つて居るんですもの、その上に、私が歸つてごらんさない。誤解がほんとなつてしまいますワ」

こう言つた。すると男が、

「成程、それは仕方がないかもしれませんが。しかし、そんな事よりも、あなたはよく考へた方がいゝでしよう。田上君の爲めにも、あなた達が結婚するのは不得策だし……………」

男は、急に語調をかへて、

「あなたも、甚だよくない。つまり先の細君を追ひ出して、跡に來た、と言ふ風になつて居ますからね」

と言ふと、女は呼吸をはづませて、こう言つた。

「あら、そんな事、私決してそんな事をしたのではありませんワ」

「でもそう言はれても、仕方がないでしょう。だから、お歸りなさい。それはあなたにすれば、苦しくもあらうが、さもなくも、家に歸つて、母さんによくおわびをしたらいいでしょう」

男は、こう言つてなだめて居た。すると、女が

「わう……そうすれば、鈴木さん、あなたやつぱり前の様に、おつき合して下さいまして？」

祈る様な聲をして、言つた。男は、暫く黙つて答へなかつたが、やがて、

「しましせう、こんな風になつたのだから、私も出来るだけ、あなたの爲めに

なりませう」

二人の話は又とぎれた。すると、頭の上で、ばさばさと樹の枝が揺れて、すぐ上の樹に、鳩位な大きさの鳥が止つた。其時、にはかに、脅れた様な聲で女が

「あら、蛇が！」

と言つた。私も蛇と聞いて、にはかに立ち上つて見廻はした。蛇は丁度、右手にある櫟の樹の枝から、隣の枝に渡らうとして、鎌首を上げて、身體を伸して居る。普通のしま蛇だが、枝を透いて、さらりとその隣の上に日光が映るので、一種の氣味の悪い色を見せて居る。

私は、立つたまゝじつとそれを見て居た。すると、女は、私の姿を見つけたと見わた、

「あらー」

と、少聲だけれど、恐怖を帯びた調子で、叫んだ。振り返ると、眞青な顔をし



て、女が私を見つめて居た。

私は動くわけに行かずに困つて居た。すると、男も、女の調子に驚いたと見て立ちあがつて、私を見た。その時に、女は何と思つたか顔を赤らめて、急がしく男にさゝやいた。そして、二人は、そのまゝ、歩き出して行つた。歩きながら、女は男によりそつて、幾度か私を振り返つて見た。

跡に残つて、私は人違ひされたなど思つたが、この私を見つめた、一分間の女の顔色に、よく、その人の全體を表はして見せた様に思へた。

もう歸らうと思つて、私も身づくろひをした。蛇は、何時の間にか隣の樹に移つてしまつて、見なくなつた。………その林を出ると、私は直きに大きな道に出逢つた。そこに行く途中、そこらを見廻したが、最前の二人の姿は見なかつた。

それから、六年経つた。或夏の初めに、私は川があつて、また澁谷に行つた。すると、圃らずも、私の見覚えのある櫟林の前に出た。見ると、林は大方切られてしまつて、跡には樹の切り株ばかりが残つて居た。柔かい草もない。懐かしい樹の陰もない。——もう涼しい風も吹くまい——

それに對ふと、一種の寂しく悲しい思ひがされたが、ふつと、思ふと、あの時の二人は今どんな運命を負つて、如何様な道を歩んで居るであらう………と、心に深くその人達の上が思へた。

裏  
畑

忽忙として、来る日も来る日も、静かに考へる隙もなく暮して行く時に、思ひも掛けず半日ばかりの隙が出来た程、嬉しい事はあるまい。そういふ時には、つと、吾に歸つた様な心持がされて、四邊のものを静かに見廻す事が出来るのである。

私は此特別の歡喜を、今朝味ふ事が出来た。

朝日の華やかな光を浴びて、裏畑の樹の下に立つて見ると、少しの間見ない中に、畑の中の草や木が、凡て變化してしまつた様に見えた。恐ろしい程、春の生ひたちの力が表はれて居るのに心づいて、そこらを見廻はして見ると、私は長旅をして歸つて来て、久し振りで、見馴れた園に來た様で、吾ながら、こ

うして居るのが、物珍らしく感ぜられる。

この裏畑と言ふのは、半分は花壇で、半分は果樹園になつて居る。花壇には今、鞭斗菜、パンゼ、一八、櫻草、なでしこ、が盛りで、その間々に一群づゝ夏咲く花の草が根をはつて、また若々しい綺麗な葉をして繁つて居る。其中に早咲の緋の牡丹が一輪、勇ましく、晴やかに日光を浴びて居る。そして、その花壇の四隅には、白と赤との躑躅が一株づゝ、花で埋められて居る様に、眞盛りだ。果樹園の方には、桃の若葉が、柔かく長く伸びて居て、柿、無花果の芽が漸く二葉三葉づゝ、幼い色をして、手を伸ばさうとして居る。私は其柿の樹に倚り懸りながら、四邊が小兒の心の様に、活々として居るのに、見とれてしまつた。

こうやつて居ると、騒がしい思ひは忘れられてしまつて、身も心も静かになり、口に出しては言はれない一種の情が湧いて来る。

あゝ、静かな思ひ深い朝だ——と思つた。

今は風もない。花も、若葉も少しも動かず、たゞ日光が、其上を勇ましくはげます様に照らして居る。それを見ると、この草木の上に、或る力が加へられて、育み助けられつゝあるので、たゞ膝まづいて、感謝したい様な心になる。

其日光を受けて居る花は、静かな姿をして居るが、尙ほ心を静かにして見ると、盛に聲を發して、其光にもを言ひ掛け様として居る様に見える。緋の躑躅は、萌ゆる熱情に心もはり裂そうなのを、一種の沈黙の間に涙らして居る。白い花は氣高く、紫のはやさしく、そして、それらの凡ての花も葉も皆天を向いて居る。

私は心を籠めて、その花を見た。

私は、今感ずるこの思ひを、こう言ひ表はし度いと思ふのである。——私の見て居るこの花や葉は、大自然の眞の姿の中に並べられて、其有る可き運命の

前に、その心の凡てを盡して咲いて居るのであると——

見れば見る程、この花は心を盡して咲いて居る！。花の營は、秋の落葉の時から、長い冬の間、沈黙の苦闘を重ねて、準備を積まれて來た。そして其來る可き天の命を待つて居たのであらう。其時、春の光が暖かく照らして、凍ねて居る空から冬の雲が押し移されると、其等のものは、呼び醒まされた様に、其力に満ちた働が初められる。更らに戦ふ可き時が來るのである。人の眼で、輕々しく花を愛らしい、やさしいと言ふ様なものではなく、花自からは、先づ心を満し、力を充實さして、自からの職分の前に、營み働く可き時であらう。

静かに見ると、花の姿には全力を擧げて、營み戦ひつゝある心を表はして居る。

生活の眞の姿は戦である。戦はいまはしく残酷なものではない。戦は神が生物に求めたまふ要求である。學者は石の原子にも、不斷の震動があると言ふで

はないか。それを聞けば生物に止まらず、世の凡ての物に向つて、神はそれ自  
 己からを、完成せしめる爲めに、奮闘せよと命せられるのであらう。

花は其命のまゝに咲いて居るのだ。こう思つて居る時に、緋の牡丹の花が、  
 少し動らいたと思ふと、はらはらと散つた、散つた花瓣は地の上に重なつて、  
 其跡に、三つに別れた、子房が緑色をして顯はれた。そして、其周圍に、老い  
 凋れた雄蕊が着いて残つて居る。この牡丹の散つた時、私は花の散る音を聞い  
 たと思つた。それは耳に聞けた音ではあるまい。心に響く響であらう。しかも  
 天地に響き渡る音の様であつた。

あゝ、Real life！と私は心に深く沁み渡つた。この花は、この花としての職  
 分を終つて、天に感謝して散つたのである。これはたゞ死のはかない姿ではな  
 い。勇ましい最後である。——見よ其戦ひの印が確りと残されて居るではない  
 か。

こう思つて立つて居ると、やがて私は自分のこの數週間の事を思ひ浮べた。  
 一時間と、静かに自分の書齋に座つて考へる事も出来ずに、心身共に疲れて、  
 亂れて居た事を、静かに思ひたざると、私は全力を擧げて、あわぎあわぎして  
 居た様である。しかし、今その狂瀾の中を脱けて、それを見返る可き處に身を  
 置いて見ると、何と言ふ淺ましい姿であつたらう。

私はそれを一つ一つ検査して見ようとした。はかない事だ。私は神様の前に  
 立つて、一日、一日、失敗して退いて居る。何と言ふみぢめな心であらう——  
 私は何事の爲めに、その様に心をも身をも疲らしたのか。とわれと自分に問ふ  
 た。私はそれに、「何の爲め」と曇りなく答へる事が出来ないのである。

値なき日！私は自分の現世に於ける生涯の中から、幾日かをこの「値なき日」  
 と言つて捨て去らねばならないのかと思ふと覺へすうなだれて、天地の間に、  
 有かなさか、分らぬ様なものと自分を思はざるを得なかつた。私は甚だしくこ

の数週間が惜まれる。

悲しむべき我よー

私は、この思ひに堪へがなくなつて、吾と吾心を咒つた。私は何を求めて居たか。私は何に心を疲らして居たか。——こう思つて、私は痛切なる悲しさを覺れた。

Real life! ——人は時として、夢を見る。夢を見て幻を追ふ。その時、その人は、屢々、このリヤル、ライフの道を離れてしまふ。偽り、欺いて、心に様々の幻を見て、自から矜つて居る。これは不具者だ。人は幾度か、神を見失ふものだ。其と同時に自分をも見失ふものだ。

其悲しみ、其願ひ、その恣な心が、自からの慾にあこがれて居る、残忍な姿、あゝこれこそ、殺戮の心であらう。猛獸の心であらう。

あゝ Real life! ——と、私はこう深く思つて來た時、心もはれた。疲れた心

にも勇氣が出た。私は再び、膝まづいて、感謝したくなつた。

静かな心には、眞の戦が起る。勇氣も生ずる——

輝ける日光!。喜び勇める花!。静かな朝の光景!

## 蟋蟀

秋ももう十月の末になつた。この頃になると、何處となく、そこら一體に哀調が籠つて居て、凡てが冷やかな地の底に、吸ひ込まれてしまふ様である。その中でも、光と音とが、とりわけ、秋の心を表はすものだ。

鈍く力の無い光が、寒そうに忍び込んで来て、室の中などの器物に、その薄暗い冷い影を落すのを見ると、一所に氣も滅入つてしまふさうだ。その上に、もうその頃になると、音でも聲でも、何と言ふ淋しい響を持つて居る事であらう。一寸言へば臺所あたりで、皿と皿とが觸はる音がしても、何處か四邊がしんとして居て、大きい寺の中で、響きわたる音の様ではないか。この頃は、天地も老人じみて來るのだが、人間も一所に氣が腐つてしまふ様だ。

## 蟋

この頃に成ると、私の室の前の小庭でも、盛に虫が鳴き出す。夜は野と言はず、庭と言はず、床の下でも、壁の中でも、種々の虫の聲が聞ゆるのだが、私の室の前には、狭いながら、花畑があるのだから、わけて、其處ばかりで、虫が鳴き盛る様な心持がされるのである。

日が暮れると、露が降りて来て、その花畑の邊が、薄く蒸氣が懸かつた様になる。すると、りりりりりりりりりり。と虫が聲を立てる。その聲までが濕めつて居る様だ。

私はこの室の中から、そのりりりりりりりりりり。と單調な聲を聞く事は、もう幾年かになる。——其聲は極めて薄い、柔かな羽を、風に慄るはせて鳴らせる音らしい。すると、石の下でも、それに應じる様な聲が聞ゆる。次には、や、勢迫つた、調子の早やい聲が草の中から起つた。こうして夜になるにつけて、この狭い花畑は虫の聲で満されてしまふ。

それを聞くと、私は胸を引きしめられる様になるのだ。しまいには、其聲に誘はれて、いつも涙がこぼれて仕様がなない。

何たる哀音であらう。よく言ふ事であるが、別れた人の事を思ひ出すとか、昔の追懐が浮んで来るとか、全くその様な事もあらうが、私は、その聲を聞くど、何とも名のつかぬ、哀しみに囚はれてしまふのである。

何故この様な感じがするのだらう、と思つて見た事は、幾度かしれぬ。——しかし、私は其聲を聞く度に、哀しみを感ずる事が第一になつて、それを深く考へる事が出来ないのであつた。

今夜もまた、其蟋蟀の聲を聞いて、胸が引しめられる様になつて来た。

りりり、りりり。と低いけれども天にも響けと叫ぶ様な聲がする。それにつれて、胸に響き渡る悲しみの情が起るのである。

私は心を静かにして、一心にその聲を聞いて居ると、りりり、りりり、と言ふ調

子が、極めて小さい波動を起して、空気に傳はつて行く。すると、それが、無窮無限の宇宙に、廣がつて響き去る様だ。その幽韻——その中に限り無い悲哀を込められて、遠く神の玉座の下まで傳へられて行く様である。

りりり、りりり。——づくづくと聞いて居ると、魂魄が身體を脱け出して、一所に誘はれて行く様な心持になつた。私は如何しても、止められずに涙がこぼれ出した。涙は出るが、氣は茫として居る。私は悲しいと言つても、我身に迫つて来る恐ろしい力のある事を感じるのでなく。自分と自分の胸から泌み出す様な心がされる。

あゝ、私のこの足は、到底この土を離れる事が出来るのではない。——と思つた。重い身體は石の様だ。

りりり、りりり。と又耳に鋭く聞える。

私はその重い石の様な身體をしては居るが、しかし、私の心は、目を開けて

翼を生じて、飛ばうとして居るではないか。誰れが教へるとはなしに、自由自在の中を飛ばうとして、あこがれて居るではないか。——この聲を聞くと、私が求めて居る自由を、實に明かに考へられる。

宇宙の無限の廣さの中に旅立つて、この肉體の目が見、耳が聞きする様な、制限されたものでなく、在るものを、在る限り見る事が出来、聞くことが出来、味ふことが出来る日は、何時来るであらう。貪慾の願ではない。廣さ無限の中に立つて、翼のまゝに飛び得る日を思ふのだ。

その時には、この肉體も清められるであらう。悲しむ可き、習慣の壓迫も逃れられるであらう。罪惡に打勝ちて、高く唱ふ事も出来るであらう。——偽りの形も消れ去るであらう。

私の悲しみは其目を望んで、今を思ふ心から湧くのである。

りりり、りりり。——其聲が又響く。

その聲を聞くと、魂がなつかしく、香ひやかな霧の中に包まれて、遠く運ばれて行く様だ。自由——靈魂の自由と、くり返して思つた。

りりり、りりり。——また聞こえる。

吾が思ひに酔つて居る私の眼には、何時か涙がかはいて居た。



## 銀杏樹

私の室の前に出て見ると、東南の方にあたつて、楓、櫟などの落葉林が見える。その丘の上、その林の端に寺があつて、その寺に、一本の銀杏の大木が聳つて見える。

落葉時になつて、その丘を見るのは、一種の壯觀である。——（これも、都會の中にばかり、住んで居る、私達にとつての感じ方であらうが。しかし、屋根と筒煙ばかりの中に住んで居るものにとつては、たしかにそう感じられるものである。）或ゆる木が、落葉してしまつて、その姿を露出して居るのを見ると、其樹の生命の大小を明かに示して居る様だ。枝を廣げて居る楓は、其古い、ふ

しくれたつた幹を並べて居る。すらつとした櫟の木。其枝が各縦横に別れて居て、その細い先端までがすかして見える。——冬の空の澄み切つた時、夕方の少し紫がかつた空合の下に立つて見ると、其等の樹の生命の力が、直ちに身に迫つて來るのかと、思はれる事がある。

林と言つても、廣い山野で育つた人の考へて居る林と同じ聯想を持たれては困る。この林は、たしか、その寺の墓地を覆つて居のであらう。

私の感じるのは、特にその林の端に聳つて居る、銀杏樹である。高さは、大方五丈もあらう。その林の樹よりか、一段と際だつて、その姿を表はして居る。樹はもとより古い。その樹の落葉して居る時に見ると、幹は、そのふしくれたつた皺までが見える。枝は、この樹の特長として、丈夫そうな、柔か味の無い直線的なのが、幹に叢生して居る。それが、先端の方になるに従つて、少しふくらんで、上端は稍すぼんで、北の方になびいて居る。——こう言ふ風で、銀

杏樹は特殊の輪郭を持つて居る樹だ。

この樹を見ると、何時も、この樹の「種」の歴史を思ひ浮べられる。「世界最古の植物」——と言ふ様な一種の不思議を籠めた表象を感ずるのである。その幹の工合、その枝の工合、全體の輪郭、それ等が凡て、この不思議を表して居る謎の様に思へるのである。

それが、夕映の空に聳わて居る時には、一層この感じを深めらるのである。空一體に、落日の光が流れて、四方が紫色にしつとりとして居る時、すつくと立つて居る。その樹を見ると、解きにくい、不思議が目前に据え付けられて居る様である。

その上にその直立して居る樹の姿が、如何にも悲壯な心を表はして居るではないか。この世界に於ける、生存の最も長い歴史を、この空と、日光とに對つて比べて居る様である。その樹と時を同じくして居たものは、「時」の上にて起つて來

た、大擾亂、大暴風雨に際して、凡て滅び去つた跡、獨り淋しく新しい時代に殘されて居る心は如何であらう。見ゆるもの、聞ゆるもの凡てが、現世界のもので、この種屬とは、何等の關係のないものばかりの中に、今日も、現世界の萬象と共に、夕映を浴びて、靜かに暮れて行く日を送くる心は、將して如何であらう。——あゝこの樹の存在は、實に悲壯な不思議な運命である。

たい現世に、在らねばならぬ故に、在る。——これ程いたましい運命があらうか。神秘！自然は、神秘の宮殿である。

二

時が次第に移つて、春になると、この「神秘」が眼を醒まして、活動し初めるのを見るのだ。空には、やさしい日光が照らして、青い空合に少し、霞が懸つた様になると、そこの樹は一齊に若芽をふいて、そよ／＼と風に吹かれる。

しかし、この丘の林の樹は、その時一番遅くまで、冬枯の姿をして居るが、やがて、楓の小枝が、何處もなく赤らんで來ると、思ふと、そこらが緑にかすむ——一番遅れて、銀杏樹も芽をふく。

直線的な枝に、芽がふつくりとふくらんで來ると、その大木は全體、薄緑をして見ゆる。其緑は一日一日と、見て居るうちに明かになつて、三日四日五日と日が立つに従つて、さつと照らす朝の光に。房々した若葉がかややいて見ゆる。——この樹の眠が醒されたのだ。醒めて、又この大氣を呼吸し様として居るのだ。その時に、もしこの樹の下に立つと、みづみづしい緑の葉は、水禽の足の形をして、一房づゝさがつて居る。それを見て見給へ、誰れでも、この葉が、この「種」の運命を、新らしく物語らうとして居るのを、感じられるであらう。

すると、或る晩風が來た！

思ふさま、吹いて吹いて、風は無慈悲にも若葉を、散々に吹きちぎつて行つた。その恐ろしい音。驕慢な仕ぐさ、戸の中で聞いて居ると、この世界のもの皆、聲をあげて、叫びながら、其暴力に自由にされて居る様であつた。——世界の平準が破れて、恐ろしい力にはかに動き初めた様であつた。——

次の朝、目をさますと、昨夜の嵐は一夜の中に静まり返つて、空は更らに美しく晴れて居る。庭に出て見ると、そこら一體に、若葉がちぎれて落ちて居る。楓、柳、楓、要冬青、それ等の葉が、小さい莖のまゝちぎれて居る。その中に、銀杏樹の葉も雜つて居た。

それを見て、銀杏樹の大木にも、如何様かの擾亂があつた事と、その樹を眺ると、嵐の後の今朝の澄み切つた空に、大きい姿が、静かに聳わて居る。緑の姿は日に輝いて、常の形がたゞ大きく見ゆるばかりである。それを見て、家を出た。家を出て、二三町、その樹の方に行くと、町の通街に、やはりその葉が

吹きちぎられて、そこらに落ち散つて居た。その一つを拾つて見ると、實に巧みを盡したものである。葉脈の線の工合、緑の色などが見るから、自然の「眞實」が迫つて来る様に思へる。私はつくづく、一夜の間に、その樹にも大事件があつたのだと思へたのである。

あゝ——この銀杏樹は、やはり現世界に存在して、現世紀の嵐にも遇ふのかと思ふと、凡ての生物が受ける宿命は、それが凡て、神の命であることを、否む事は出来ないと思はれた。

あゝ存在は、其自身不可思議である。

### 三

それから秋になつて見ると、この樹に、實がなる。黄い肉でつゞまれて、その實の形が面白い。何處か、熱帯の椰子の實に似て居る様だ。一寸見たらばそう

は思へぬが、よく比べて見ると、なかく似て居る。

私は、其實を見て居ると、それに、實に深いいたましい運命の約束が籠められて居ることを思はざるを得ない。よく考へて見たまへ。この實が土に埋まつて、濕氣と、温度とを受けて、二葉の芽が出る時。——「種」の使命を帯びて、生存の形を表はして来る時。——すでに、其「種」の世は過去の中に葬られつつして、この世とは相結ばれぬものである。現世の圏外に置かれた様な、運命を荷つて居るのではないか。

初めの幾萬年は、永劫の海の中に消去つてしまつた。そして、後の幾萬年も又、疾走しつゝ——しかし、擾亂し、沸騰し、叫び、歌ひ、夢み、しつゝ——過ぎて行くのではないか。この間に立つて、銀杏樹は在らねばならぬ故に、今日も立つて居るのだ。

人類にも同様の悲しみがある。文明とは何等の關係なく、たゞ舊い歴史の物

語を荷いて、時から時の間を過しつゝある國民があるではないか。又は、烈しく變轉して行く思想の潮流の渦巻の中に、巻き入れられ、殘し去られて、古い時代の思想と感情とを抱きながら、新しい時代の日に照らされて居る、哀殘の人もあるではないか。——心を静かにして思ふ時、これらの人々の運命はどんなであらう。その思想が復活し、その勢力が再び起つて、世界の文明の波の中に、立つて叫び呼ばはる日があらうか。あゝナイルの兩岸にピラミットを築いた國民の後はあつても、その國民の中に、新しい産聲はしても、又新しい力が生れて来る日があらうか。

しかも、此の世の嵐は、等しく他と共に、それ等の國民の頭上に狂ひ吹くのである。

存在はそれ自身不思議でもあるが、又大なる悲哀でもある。

## 『私 雨』

今朝上野では失禮。今はもうこんな處に来て居ます。——旅と言ふものは、面白いものだ、刻々に變化して行く。今朝君と上野で別れたと思ふと、夜はもうこんな山の頂上に来て座つて居る。そして、東京では君は今夜あたり、何をして居るだらう、などと想像しながら、非常に懐かしく思つて居る。それであ、今夜の話でも書いて送らうと、こうして筆をとりました。

實は、明日郵便夫が上つて来る日ださうで、この家では今夜は皆(お客も、家の人も)手紙を書くので急がしい。こんな山の頂上だから、郵便夫も、三日に一度づゝ(それも夏だけだそうです)位、上つて来て、こちらへの手紙を渡しこちらからの手紙を持つて下るのださうです。——そこで、僕も君へ、第一の

手紙を托げ様と思ふのです。

先づ、途中の事から書き度いが、それは次の便に譲ります。と言ふのは、それより先きに書かねばならぬ事があるからで。——まづ山の登り道は、一番裾が非常に大きな松林でした。その間(林の幅)約一里。それから草山、ゆるい傾斜で、ゆつたりとして、草野を旅して居る様、そこら一面に草花が咲いて居た。その間が二里と言ふ事です。その道を行きつくすと、中腹の小村に着いた笑輪と言つて、廿戸許。その入口の處で、村の人に逢つた時は、久しぶりで人聲を聞いた様な気がしました。そこで暫く休んで、出ると、此度は険しい坂路で木立の中に入るので。その道にさしかると、七月だと言ふのに、栗の花が咲いて居て、鶯が鳴いて居ました。その上りが一里あるそうです。溪流を渡つたり。薄暗い茂林の下を通つたりして行くと新坂と言つて、一番険しい坂に出ました。水道の様な處を傳つて上るので、一日の疲れが一時に出る様でした。

それを上りつめると、又廣い草山、頂の外輪山のたるみに出るので、これから、下り道です。(外輪山の内側になるのです)。

僕の手紙は、こゝに上つてから、後の事を書かうと思ふのです。

新坂の上に立つて見ると、上つて来た道の、低い山や、林や、草野が脚下に見えて、山と山との重つて居る間から、遠く平地を流れて居る河が、銀色に光つて見わたるのです。こゝに立つと、自分ながら、高い處に居ることを感ぜられました。

それから少し行くと、又木立の中に入った。この木立には、見馴ない樹がいくらもありました。幹が赭の上に、胡粉をぬつた様な色をして居て、滑かて、枝がやさしい、葉は小さくつて丸い。これが白樺と言ふのだそうです。山に非常に多い樹の様だ。その外には、海棠の様な葉をして、小さい果のなつて居る山梨と言ふ樹、楓、樺なども交つて居ます。(それに一體の樹の恰好が特別の様

に見えます。直立して、上へ上へと向つて居る樹がなく。大方は傘の様に、枝が広がつて、何となく上から壓迫されて居る様な形をし見へるのです。その林の中を歩いて行くと、冷やかな風が、何處か肌に沁みる様で、日光は夏らしくまばゆく照らしては居るが、凡ての感じ方が異ふ様でした。それに、何處でも人離れた林に來ると、一種の香がするものだが、こゝでも、嗅ぎつけぬ香がするのです。僕は、この香を嗅ぐと、いつも人の犯して居ない自然の静けさを感ずる。

やがて、其林の中程に來ると、樹の透間から、美しい女神の姿が見えた。心を籠めて人を見る少女の眼の様です。僕は兼ねて聞いては居たが、此程、美しく静かで懐くあらうとは思ひませんでした。

それから僕は急いで、其林を出た。すると湖は深碧を湛へて、廣い姿を見せました。僕の立つて見た處は、林で圍まれた草野です。紫の花が一面に咲いて

居る。この草野はゆるい傾斜をして、湖畔の茂林の處でつきて居るのです。其林は、湖にそつて茂つて居るが、右手の方がわけて茂げつて、鬱として山を包んで居る。湖の半分はその方に隠れて居ます。

向ひ岸は、やはり茂林です。その林はすぐ險く聳つて居る、外輪山に連らなつて居る。外輪山はと云ふと、こゝから、正面の稍右の方にあたつて、一番高く聳つて居る山が、根で、それから左右に脈が連つて居る様です。左の方のは壁の様に、頂の續いたのが湖を圍んで走つて居る。それは草山です。左の端、湖が少し入江の様になつて居る處からは、山が亂れて、二つの脈になつて居る。一つは湖に添つて、僕の立つて居る處まで來て居る。一つはそれとその後の方についで居ます。右の方は、圓い大きな山が、僕の立つて居る林の後に聳つて居る。その山と、前の高い山との間が、大きくたるんで、その後から更らに後の山が面を出して覗いて居る。こゝ言ふ風で、この外輪山は、この湖を取りか

こんで居るのです。

そして、その山々の麓が皆この湖へ集まつて居るので、湖はこの山全體の眼の様です。都で育つて、都でばかり暮して居た君には、とてもこの景色は想像も出来まいと思ひます。僕が立つて居た。野と云ふのは、廣さ周囲が七八町許森に圍まれて居るのですが。山に放牧してある牛の牧場だそうです。今は、其牛は何處へか行つて、影も見せない。ただ處々に一本一本、白樺の大木が、鬱として枝を廣げて居ます。中には雷が落ちて、枯れたまゝ立つて居るものもある。その幹に日が輝やいて、銀白の光を放つて居る。それは丁度太古の墓の印が残つて居る様です。四邊の緑葉は、日に反射して、晴やかにきら／＼して居る。そしてその茂林の影が湖に映つて。静かな姿は、尙ほ思ひ深い心を表はして居る様です。

満山が寂とし、静まり返つて居る様で、その中に立つて居ると、僕もこの自

然の中の一になつて居る心がされる。その時、後の方で鶯が鳴きました。すると、その聲が林から林へと反響して、消えて行く。——其静けさ、其なつかしさ、僕は、何事も考へる事が出来ませんでした。一生をこの湖畔で送つても恨まない事と思つたのです。或ゆる心が、擾かしい都の中では、道傍の石ころの様に、ころがつて居るが、こゝでは、その一つ一つが生きて、静かに呼吸し、目を開いて居るのです。

その時は丁度、四時すぎでした。

やがて、案内の爺が跡から、追ひ付いて來たので、色々の事を聞きました。

僕の行く處は、これから右手の林を脱けて山の大たるみになつて居る裾の、湖畔だそうで、こゝから廿町位だと言ひました。

そこで、僕はこゝの景色を捨て、早く吉澤君に逢はうと、急ぎ出したのです。



僕の中に道は、林の中に入った。大木の枝がさし交して、そこらが湿気を帯びて居ます。それを四五町も来たと思ふと、道が薄暗くなるので、いぶかしく、枝のすき間から見ると、空がもう暮らしい色をして居る。驚いて聞くと、西の山に日が落ちたので、これから、次第に暮れて行くのだと言ひました。前の野に立つてからわづかに一時間許りの間にすぎないのです。

林をぬけると、又草野に出るのですが、そこに神社がありました。そこから道が一山りして、愈々僕の目的にして居る頂上の旅宿が木立の中に見わたるので、

新坂からこちら、家と言ふものは、こゝが一軒あるぎり、外には人の聲も聞くことが出来ないのです。この家は、この山陰にたつた一軒、ぼつりとして置かれて居るのです。やがて、その家に着きました。着いて、先づ吉澤君はと聞くと、二階に呼びに行つたが、例の顔の大きい吉澤君がひよつくり降りて来た。

二人顔を見合せると、

「ヤー」

と言つたぎりでした。あとで聞くと、吉澤君は、こんな嬉しい事はなかつたと言ふことです。

「そちらに廻りたまへ」

と、僕に別の上り口を教へてくれましたから、庭を通つて行くと、ガラス障子が閉めてあつて、そこが入口になつて居るのです。そこから入ると、僕はすぐ其處で、話の女を見たのです。そら、一昨夜吉澤君の話だと言つて君に話したでしょう、例の凄いな、それです。僕が入つた時には、其入口のわきの室で髪を結はして居たのです。青白い横顔を見せたまへ、黙つて見むきもしない。それを僕は覗ふ様にして見たのですが、其顔が何となく人を壓迫する様な心持がされました。

草鞋をぬいで二階に上ると、やがて薄暮の光がそこらに漲つて、ランプがつけられた。

やがて晚餐が運ばれました。食器も膳も綺麗です。お菜は生瓜もみ、蕨と椎茸との汁、豆腐と卵をゆるく煮たのどです。米も白いし、室も清らかです。

膳が下げられると、茶をのみながら、吉澤君と今日の失敗や、東京の話などをして居る處に、障子がすつと開いて、さつきの女が静かに入つて来ました。少し笑を含んで、そこに坐つたが、僕の丁度正面です。はつきりした、青白い顔で、眼が冷やかに見えます。眉も薄い。自分の心を、人に刻み込む様な力を持つて居る眼に見えました。そして其聲が澄み切つて居ます。

僕は少しまぶしくもあつたので、立つて障子をあけて見ると、(こゝは湖の方に向いた室です) 今日歩いて来た道も、湖も、山も、闇の中に包まれてしまつて僅かに空に星があるばかり。呼吸もひそまる程、閑として音がしないのです。

僕はこの時眞に、沈黙せる自然の威厳を感じました。吾々を壓する力が、この暗の中に籠められて居る様で、覺えず障子を閉めました。そしてもとの坐につくと、又その女と相對したのです。三人とも、暫く無言でした。

「今日からにぎやかにになりますよ」

と言ふと、女が

「そうですね、……………(と僕を見て)こゝは淋しうございますよ。あなたは御しんぼうが出来ますか」

こう言つたのです。この調子、この言ひ振りが、如何にも人の心を覗つて、人を試みる様に聞けるので、僕は脅かされる様でした。

「淋しいのは何でもないですよ」

と言ひはしたものの、心に十分不安を感じのたです。

それからは又黙つてしまひました。四邊がしんとして居る。其時、室のすぐ前にある樹の葉に、ざあ、と雨のかゝる音がした。と思ふと、又とだへてしまつた。その寂しい音と言つたら、如何にも人氣たへた處を、何物かがひそかに過ぎて行くの、様でした。

「何でしよう、雨ですか」

と覺わず聞くと、その女は靜かに僕を見て、

「わ、夜になると時々降ります。私雨と言つて低い雲が、通つて行く時に、降るのです。」

「私雨」

僕は珍らしい名だと思ひました。すると又、遠くの方で音がする。その音が次第に近づいて來ると思ふと、この家の周圍の林に、降りそゞぐのです。その響、寂しく重くるしい、その響。——と思ふ間もなく、音はたへてしまつた。

この野を過ぎて行く靈魂——と僕はどうしてもそう思へたのです。そして、その音のたへた後の淋しさ、僕は初めて、千歳、人のほしいまゝな力の加へられて居ない自然の心を思へたのです。

僕等三人は、黙つてその聲を聞いて居ました。誰れの顔にも、等しく言葉が発する餘裕を失つて、たゞ何物かに壓せられて居る様でした。暫くして僕は、そつと障子を開いて見ると、空には星が燦爛として輝やいて居る。四邊は初めの様に静かです。

僕は今日來た道を思ひました。草野、湖水、林、枯木、花、それ等が今、この間に包まれて、その雨に打たれる姿を思つたのです。——その寂寥な事。僕等は今迄自然の眞の姿を、殆んど知らなかつたのです。

この手紙はあした郵便夫が持つて山を下りるでしよう。これが君の手にとりくのはその次の日と思ひます。僕は早く、これが君の手にとりくことを祈つて

居ます。——草々。……赤城山の頂にて。

詩集